宮崎市制 90 周年記念事業

生目古墳群シンポジウム 2014 報告書

生目古墳群の実像

～15年目の再検討～

生目古墳群シンポジウム2014報告書

生目古墳群の実像　正誤表

頁	行	誤	正
23	33	最大規模ある	最大規模である

ごあいさつ

国指定史跡生目古墳群は、九州で唯一100mを超える前期前方後円墳が３基造られ、南九州在地の埋葬方法である地下式横穴墓と全国的に広がった前方後円墳というお墓の形が融合した古墳が存在するなど、全国的に見ても非常に重要な古墳群です。

本報告書は、平成26年11月1日に市制90周年記念事業として開催いたしました「生目古墳群シンポジウム 2014」を一冊の本としてまとめたものです。当日は、基調講演をいただきました白石先生を始め、講師の先生方には生目古墳群を中心とした南九州の古墳文化について、熱心にそしてわかりやすく語っていただきました。本書はシンポジウムの記録集であり、ご来場できなかった皆様も、この本を手にすることによって、生目古墳群へのご理解を深めていただけるものと思います。

最後になりましたが、本書の刊行に際しまして、講師の先生方にはご講演の文章化にあたって、再度大変なご尽力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年３月
宮崎市長　戸敷　正

日程

8:30　受付
9:30　開会　あいさつ
　宮崎市長　戸敷　正
9:35　生目古墳群の概要
　宮崎市教育委員会 文化財課主任技師　石村友規
9:50　基調講演
　「古墳からみた４・５世紀の南九州とヤマト王権」
　大阪府立近つ飛鳥博物館長　白石太一郎 氏
10:50　休憩
11:00　パネルディスカッション
　「生目古墳群の実像15年目の再検討」
　パネリスト
　兵庫県立考古博物館長　石野博信 氏
　大阪府立近つ飛鳥博物館長　白石太一郎 氏
　九州歴史資料館名誉館長　西谷　正 氏
　宮崎大学名誉教授　柳沢一男 氏
　コーディネーター
　宮崎県文化財課専門主幹　北郷泰道 氏
12:30　閉会

目次

講師紹介

生目古墳群資料
　生目古墳群
　　及び周辺主要古墳・古墳群位置図 …… 1
　　生目古墳群主要古墳・地下式横穴墓位置図 …… 2

生目古墳群の概要 …… 3

基調講演
　「古墳からみた４・５世紀の南九州とヤマト王権」 …… 9

パネルディスカッション …… 21

講師のご紹介

パネリスト

石野 博信 氏　いしの・ひろのぶ

1933 年宮城県生まれ。1961 年関西大学大学院修士課程修了。兵庫県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所調査課長、研究部長、副所長兼附属博物館長、徳島文理大学教授、香芝市二上山博物館長などを経て、現在、兵庫県立考古博物館長、香芝市二上山博物館名誉館長。1996 年から生目古墳群史跡公園整備専門委員会委員。主な著書に『古墳文化出現期の研究』、『古墳時代史』、『日本原始・古代住居の研究』、『古墳時代を考える』、『邪馬台国の考古学』、『大和・纒向遺跡』などがある。

白石 太一郎 氏　しらいし・たいちろう

1938 年大阪市生まれ。1968 年同志社大学大学院博士課程満期退学。（財）古代学協会、奈良県立橿原考古学研究所、国立歴史民俗博物館、総合研究大学院大学、奈良大学などを経て、現在、大阪府立近つ飛鳥博物館長・国立歴史民俗博物館名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授。専攻は日本考古学。考古学の立場から日本の古代国家・古代文化の形成過程を追及。1996 年から生目古墳群史跡公園整備専門委員会委員。主な著書に『古墳と古墳群の研究』、『古墳と古墳時代の文化』、『考古学からみた倭国』、『古墳とヤマト政権』、『古墳の語る古代史』、『考古学と古代史のあいだ』、『古墳からみた倭国の形成と展開』などがある。

西谷 正 氏　にしたに・ただし

1938 年大阪府高槻市生まれ。1966 年京都大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所、福岡県教育委員会、九州大学を経て、九州大学名誉教授。その間、佐賀県立名護屋城博物館長・伊都国歴史博物館長を歴任。現在、海の道むなかた館長・九州歴史資料館名誉館長・糸島市立伊都国歴史博物館名誉館長。専門は朝鮮半島を中心とした東アジア考古学。1996 年から生目古墳群史跡公園整備専門委員会委員長。主な著書、編書に『韓国考古通信』、『古代朝鮮と日本』、『考古学による日本歴史』、『東アジア考古学辞典』、『魏志倭人伝の考古学－邪馬台国への道』、『古代日本と朝鮮半島の交流史』などがある。

柳沢 一男 氏　やなぎさわ・かずお

1947 年群馬県生まれ。1970 年國學院大学文学部史学科卒業。福岡市教育委員会、宮崎大学教育学部助教授経て、1996 年に宮崎大学教育学部教授（1999 年より教育文化学部）、現在、宮崎大学名誉教授。1996 年から生目古墳群史跡公園整備専門委員会委員。主な著書・論文に「古墳の変質」『古代を考える 古墳』、『描かれた黄泉の世界－王塚古墳』、「韓国の前方後円墳と九州」『古代日本の異文化交流』、『生目古墳群と日向古代史』、『邪馬台国時代のクニグニ 南九州』、『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』などがある。

コーディネーター

北郷 泰道 氏　ほんごう・ひろみち

1953 年宮崎県都城市生まれ。立正大学文学部史学科考古学専攻卒業。1980 年から、宮崎県教育庁文化課で県内遺跡の発掘調査に携わる。2000 年から、西都原対策班主幹として、西都原古墳群の整備・活用事業及び西都原考古博物館建設事業を総括。宮崎県立西都原考古博物館、宮崎県埋蔵文化財センター所長を経て、現在、宮崎県教育庁文化財課専門主幹、南九州大学非常勤講師。2007 年から生目古墳群史跡公園整備専門委員会委員。主な著書に『熊襲・隼人の原像－古代日向の陰影－』、『西都原古墳群－南九州屈指の大古墳群－』、『古代日向・神話と歴史の間』、『海にひらく古代日向』などがある。

生目古墳群資料

図１　生目古墳群及び周辺主要古墳・古墳群位置図

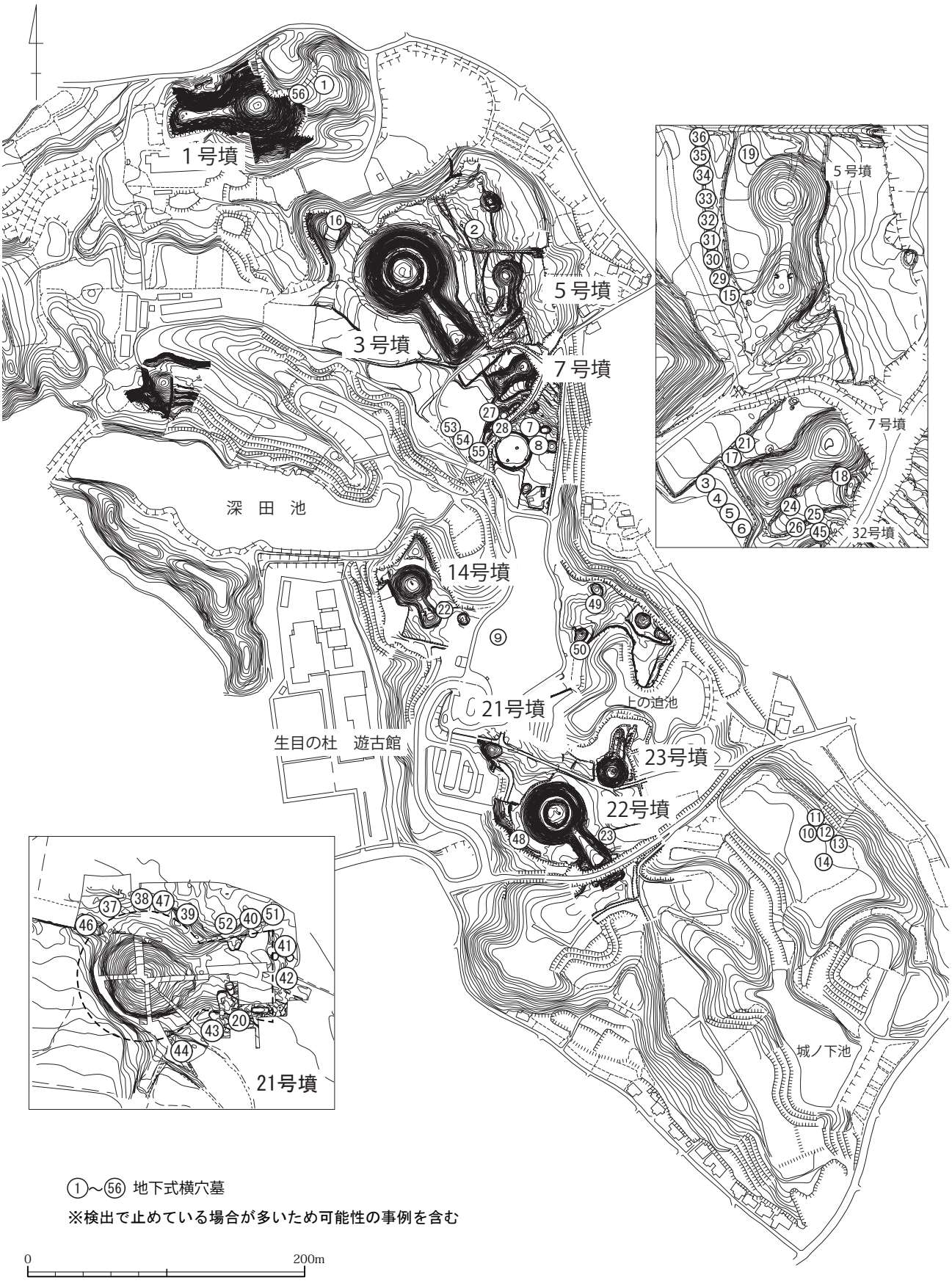
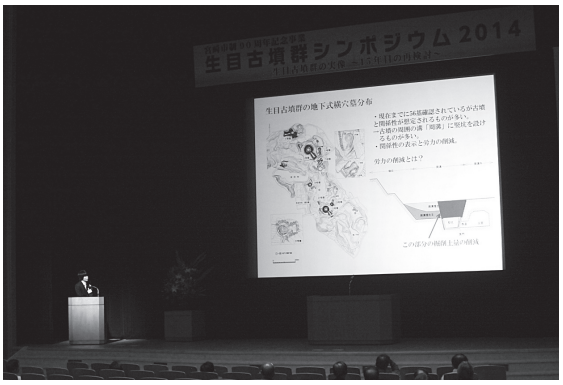


図２　生目古墳群主要古墳・地下式横穴墓位置図　(S=1/5200)

生目古墳群の概要　宮崎市文化財課 石村友規



ただ今、ご紹介いただきました宮崎市文化財課、生目古墳群の発掘調査を担当しております石村と申します。よろしくお願いします。

それでは、生目古墳群の概要を説明していきたいのですが、生目古墳群の説明に入る前に、まず古墳時代のお話を少しだけさせて頂きたいと思います。古墳時代とは、３世紀中頃から６世紀終わり頃までを主に指しますが、これは前方後円墳が造られた時代になります。また前方後円墳が造られなくなった後の、７世紀を終末期として古墳時代に含める場合もあります。列島内には 20 万基とも言われる古墳が存在しますが、そのうち約５千基が前方後円墳と呼ばれる形の古墳です。この古墳時代は、古墳の大きさと形によって身分秩序が表現されておりまして、最大規模墳がある近畿中央部地域を中心とした政治的なまとまりの存在が想定されています。日本列島内の最北の前方後円墳が岩手県奥州市の角塚古墳、最南端が鹿児島県の肝付町の塚崎 39 号墳と列島の北から南まで広がった古墳の形となります。

次に古墳時代の身分秩序の体系というのがどういうものであったのかというのをモデル化されたのが、大阪大学におられた都出比呂志先生です。都出先生は、古墳の形と墳丘の規模に、その人物の階層や政治的身分が表現されていたと考えられております。また、墳形が被葬者の出自や連合の関係を表して、墳丘の規模でその人物の実力を表したという見解もあります。その中で、最上位ランクの古墳は、やはり最大規模墳が造られる前方後円墳です。それに次いで前方後方墳、円墳、方墳という順番になります。７世紀になって前方後円墳が造られなくなった後は、初めは方墳が最上位ランクに、その後に、八角形墳という形の古墳が最上位ランクの古墳となります。

次に、前方後円墳の形と構造についてご説明をしたいと思います。図３をご覧ください。この後の生目古墳群の説明で出てくると思いますが、前方後円墳というのは、通常、大きく何段かに造られています。今図示されている前方後円墳の場合は、後円部、円の部分が大きく１、２、３段に分かれていると思いますが、この場合は後円部３段、前方部は大きく１段、２段になっていると思います。つまりこの前方後円墳は、後円部３段、前方部２段築成という構造になります。またこの後生目古墳群の説明で、段の中の平坦な部分をテラス、斜面部は斜面、

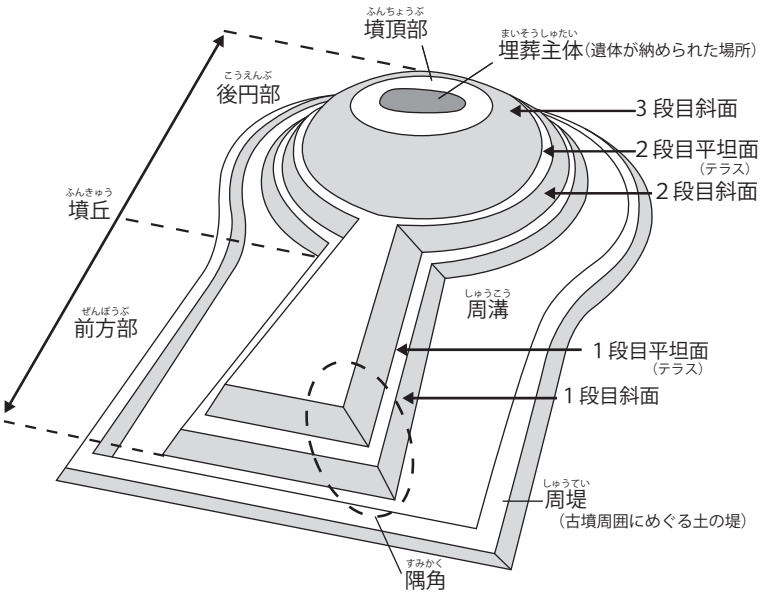


図３ 古墳の各部名称

そのままですが、そういった用語を使ってご説明をしますので、資料で確認しながら聞いていただければと思います。

それでは、生目古墳群の概要に入っていきたいと思います。生目古墳群は、市街地から北西に約６㎞ほど離れた位置にあります。皆様よくご存じとは思いますが、ソフトバンクホークスがキャンプを開きます、生目の杜運動公園の直ぐ北側の丘陵とその周辺に古墳は点在しています。古墳の基数は最新の調査成果を反映いたしますと50基になります。パンフレット等では51基となっていますが、昨年度の調査で１基、実は古墳ではないものが確認されましたので、最新の情報では 50 基となっています。今後手続等を踏みましてパンフレット等も随時修正をかけていきたいと思っております。

生目古墳群がある跡江丘陵の形状ですが、長靴のような形をしています。東西が 1.2 ㎞、南北が 1.3 ㎞ほどですが、その丘陵の中心部付近の、平坦な地形の部分にほとんどの古墳が分布しています。また丘陵から１㎞ほど離れた位置に大淀川が流れていますが、古墳群を取り巻くように流れています。また、大淀川の支流である本庄川と、本流である大淀川の合流地点も丘陵の直ぐ北西にありますので、河川を非常に意識した立地と言えます。図１をご覧ください。生目古墳群の位置は図面の中央右上辺りになります。また大淀川を挟んで対岸側に下北方古墳群という古墳群があると思います。皆さん平和台公園をご存知かと思いますが、平和台公園がある丘陵上とその下の台地上に分布しています。生目古墳群は古墳時代中期には墳丘規模が縮小していきますが、そのかわりに台頭してくるのがこの下北方古墳群になります。

次に図２をご覧ください。これから説明する生目古墳群の中でも特徴的な古墳の位置について確認したいと思います。まず、南九州を中心に分布する地下式横穴墓というお墓がありますが、それと大きく関わる前方後円墳の７号墳と 21 号墳の位置です。７号墳は古墳群の中心からやや北寄り、21 号墳は史跡公園入口のロータリーのすぐ脇にあります。次に、生目古墳群の中でも一際大きな、１号墳、３号墳、22 号墳についても説明をさせていただきますが、１号墳は古墳群の北の端、３号墳はそのすぐ南側、22 号墳は先ほど見ていただいた 21 号墳の東隣にあります。

それでは、地下式横穴墓の構造について説明していきたいと思います。図４は宮崎市生目の杜遊古館、その中に生目古墳群のガイダンス施設がありまして、そこに設置されている模型の写真に文字を入れたものです。地下式横穴墓というのは、竪坑という、縦方向の穴、写真では人が沢山立っていると思いますが、その下に少し土の色が違うところがあると思います。そこが竪坑になります。最初にそこを掘削して、今度はそこから横方向に遺体を納める部屋、玄室を掘り込んでいく構造になります。この地下式横穴墓は南九州の在地的なお墓の形です。ただ、数は多くはありませんが、他地域にも少し見られます。また、南九州と括られることが多いのですが、実は薩摩半島に広がっていないということは注意が必要な部分になります。この地下式横穴墓ですが、生目古墳群の中で現在までに可能性例を含め 56 基確認されています。生目古墳群では主に古墳の周溝を利用して造られますが、それはその古墳の被葬者との関係性の表現と、労力の削減という 2 つの意味があると考えられます。労力の削減というのは、周溝の中に造ることによって、竪坑を掘削する土量が減ることになるという部分です。ただ、主な意味合いとしては関係性の表

現、元々ある古墳の周りに地下式横穴墓を造るということで、その古墳の被葬者と関係性がある、ということを表現したのではないかと考えられます。

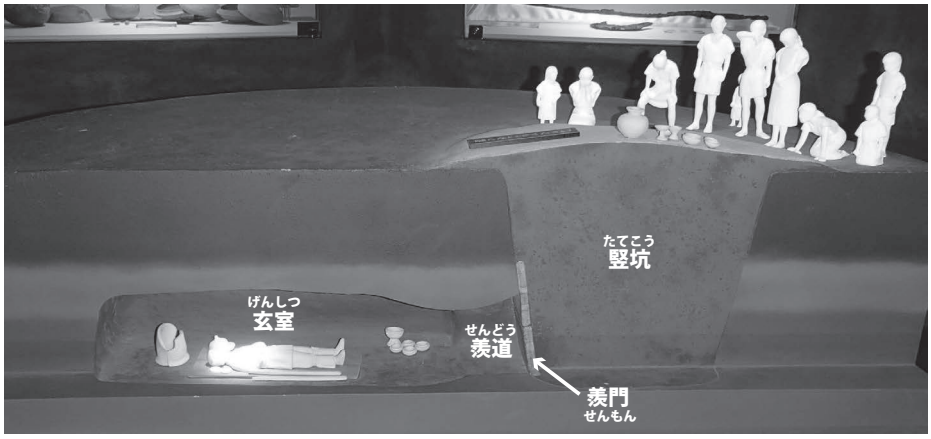


図４ 地下式横穴墓の各部名称

それでは、生目古墳群の具体的な資料に入って行きます。まず宮崎平野部最古の地下式横穴墓の紹介をしたいと思います。図５をご覧ください。これは生目 21 号墳の周溝内に造られた生目 43 号地下式横穴墓という地下式横穴墓です。43 号というのは、生目古墳群の中で 43 番目に確認された地下式横穴墓であることを意味します。埋葬の際に、竪坑上に置かれたと思われる土器が出土していますが、その土器の年代観から５世紀の前葉に造られたと考えられています。従来、地下式横穴墓は、５世紀の初頭にえびの盆地で成立したと考えられていたのですが、ほぼ同じ時期の地下式横穴墓が宮崎平野部でも見つかったということで、今後は成立や伝播に関してもう一度考え直す必要があるのではないかと考えられます。非常に特徴的な構造をしており、左側が玄室で遺体を納めるところ、右側が竪坑になります。竪坑と玄室の形がほとんど同じで、その間の羨門と呼ばれる門のような形になる部分が、あまり発達していないシンプルな形状をしています。図４の地下式横穴墓の模型と比べていただくと、その特徴がわかりやすいと思います。

次に紹介するのは、前方後円墳の中心埋葬施設に地下式横穴墓が採用されている事例です。つまり前方後円墳を造った人自身が地下式横穴墓に埋葬されている事例が生目古墳群で確認されています。それが生目７号墳です。竪坑は後円部南東側の周溝内に掘り込まれ、後円部の中心に向って玄室を掘り進めています。これが生目 18 号地下式横穴墓です。竪坑は調査を行ったのですが、玄室は保存のため調査を行っていません。ではなぜ、玄室が後円部の中心に向かって掘り込まれていることがわかるのかといいますと、玄

図５ 生目 43 号地下式横穴墓

室の天井が崩落し、後円部の墳丘面が陥没していることと、地中レーダー探査によって反応が確認されているためです。また、陥没坑やレーダー探査の結果から、この地下式横穴墓の玄室の規模は５mを超える大規模なものであることもわかります。この規模が大きいという点と、周溝内に堆積した土の状況と地下式横穴墓の竪坑の掘り込まれた面を検討した結果、７号墳と同時に 18 号地下式横穴墓が構築されていることが明らかになったことから、７号墳は 18 号地下式横穴墓に埋葬されている人物のためのものであると言えます。

次にもう一つの生目古墳群の大きな特徴ですが、生目古墳群は 100m級の前方後円墳を３基有しております。しかもそれが全て、古墳時代前期に造られています。このような事例は九州島では唯一です。図６は生目古墳群の主要な古墳の時期を表したものです。上が古い時期、下に向かってだんだん新しくなります。この図は発掘調査の成果によって書き換えられていきます。先程の 100m級の３基ですが１号墳、３号墳、22 号墳がそれぞれ４世紀前半、４世紀中頃、４世紀後半に位置付けられていますが、これらについて細かく説明をしていきたいと思います。

まず 22 号墳です。私たちは出土した遺物の形の変化や種類などを古墳の時期を決めるための指標にします。22 号墳からは壺形埴輪と土器が出土していまして、３基の中で唯一、遺物から時期が決められる古墳になります。どこから遺物が出土したかといいますと、22 号墳には前方部側面に、現地表面から見えないのですけれども張り出し部という溝で囲われた出っ張りのようなものがあります（図７）。ここから高坏と呼ばれる土器が出土しました。この土器の形状から 22 号墳は４世紀後半に位置付けられています。

次に３号墳です。22 号墳とは異なりまして、土器などの遺物で時期を決めたのではなくて、古墳の形から時期を決めております。古墳の形の変化というのは土器ほど明瞭に時期を表すものではありませんので、今後の調査によっては若干時期が変わるかもしれません。ですので「時期比定の根拠が弱いもの」に含まれています。実は３号墳にも 22 号墳と同じように張り出し部があり、発掘調査を行ったのですが、残念ながら遺物は出土しませんでした。３号墳で特徴的なのは、古墳の表面全てを石で覆う構造です。図８は３号墳の前方部の前面の写真ですが、墳丘の一番端よりも外側にも礫敷があります。墳丘の各段平坦面、斜面、墳頂も石で覆われていますから、まさに古墳全面を石で覆う状況です。もう一点、３号墳には大きな

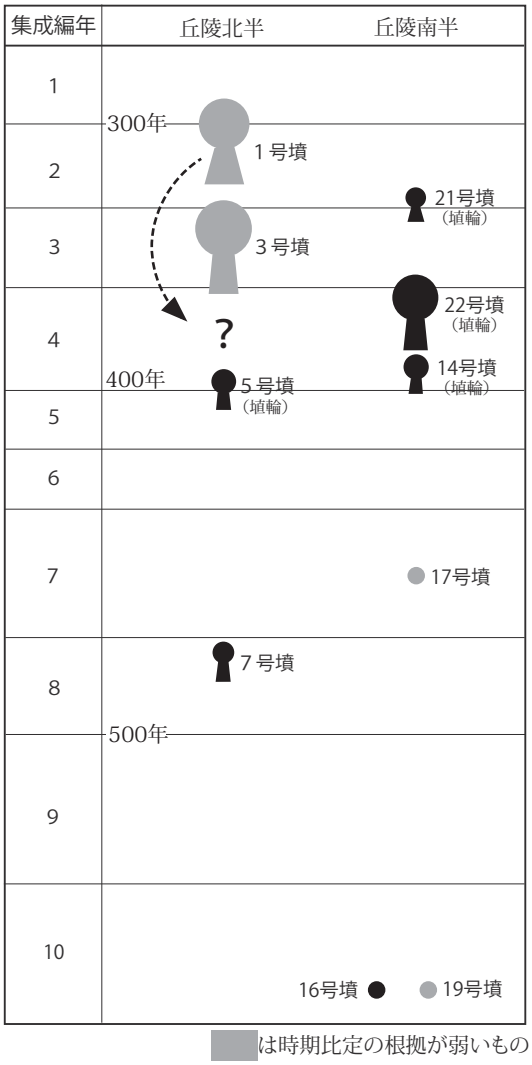


図６ 生目古墳群主要古墳変遷図

特徴があります。それは３号墳の後円部の形状なのですが、発掘調査以前は妙に幅広い２段目テラスだなと思われていましたが、それが後世の改変によるものだったということが分かりました。調査によって、中世に掘り込まれたＶ字形の溝が確認されました。おそらく、３号墳の後円部墳頂に砦のようなものが造られ、それを守るためにこのような溝を巡らせたと考えられています。

最後に１号墳です。昨年度から発掘調査を開始し、今年度も継続して行っています。今年度の調査は７月から初めていますが、様々な調査成果が出ていますので、少し紹介したいと思います。後円部の各段平坦面、斜面、墳頂が石で覆われていたことは、平成 25 年度の調査で確認されていましたが、前方部は残りが悪いこともあり、はっきりしていませんでした。今年度、後円部と前方部が接続する場所の墳頂部分を調査したところ、前方部の墳頂面には石がないことが明らかになりました。斜面、各テラス面は石があることから、前方部の墳頂面だけ石がない状況です。また、同じ調査区内で後円部の２段目テラスが確認されましたが、前方部の墳頂部よりも低い位置にあることが分かりました。ここから何がわかるかといいますと、昨年度の調査成果で、後円部が３段に造られていることははっきり分かっていたのですが、前方部は残りが悪かったため３段なのか２段なのか明確ではありませんでした。しかし、後円部２段目テラスが前方部墳頂面よりも低い位置にあるということは、前方部も３段築成になる可能性が高いということになります。さて、１号墳の最も大きな特徴と言いますと、昨年度、現地説明会に来られた方はご存知と思いますが、後円部の葺石が非常に良好な状態で残されて

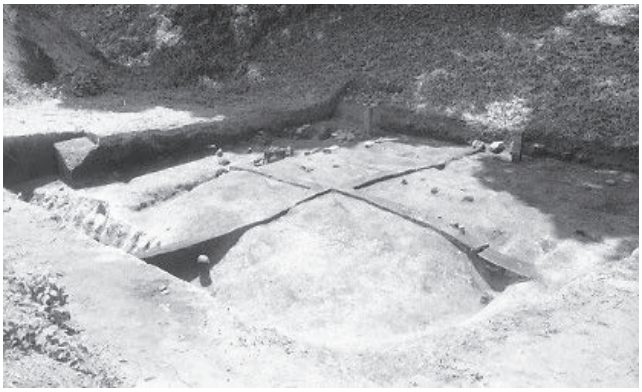


図７ 生目22号墳張り出し部

図８ 生目３号墳前方部前面

図９ 生目１号墳後円部３段目波状葺石（上から撮影）

いたということです。その中で階段状の葺石というものが注目されました。後円部の３段目斜面の葺石が、見かけが細かな階段のように積み上げられていたのですが、今年度も別の調査区でやはり確認されております。昨年度よりもさらに残りが良く、より明瞭な状態で、まるで波打つような状況で見つかっています（図９）。また、古墳の斜面と平坦面の外側の角が確認されました。当たり前のような感じがしますが、ここが古墳で最も壊れやすい場所ですので、外側の角が残っているということは非常に貴重な事例です。これらの調査成果の中で、時期を決める上で特に何が重要かといいますと、前方部が３段築成になるということです。前方部が３段になりますと、時期が少し新しくなる、４世紀の中頃や後半に下る可能性が出てきたということです。ただ、結論を得るにはまだ少し資料不足です。特に後円部のテラスと前方部のテラスがどういう繋がり方をするのか、連続して繋がるのか、一度途切れて派生するのか、その部分を今後の調査で明らかにしなければならないと思います。

非常に早足でしたが、生目古墳群の概要について説明させていただきました。ご清聴ありがとうございました。

大阪府立近つ飛鳥博物館長
白石 太一郎　氏

ただいまご紹介いただきました白石でございます。今日は「古墳から見た４・５世紀の南九州とヤマト王権」というテーマで約１時間ほどお話をさせていただきます。

本当は、私などよりも南九州で古墳の研究をやっておられる柳沢先生、あるいは北郷さんなどにお話しいただいた方がいいんでしょうけども、ちょっと離れた所から見る事も、また意味があるのではないかということで、私に喋れということになったんではないかと思います。

皆さんもご承知と思いますが、ここ 20 年あまりの間に南九州における古墳の研究は非常に進展致しました。これは具体的には、一つは今から 23 年前だそうですが、柳沢一男先生が宮崎大学に赴任され、古墳の研究者として本格的に日向の古墳を再検討されました。そして、従来注意されてなかった色々な点に気づかれました。

それからもう一つは、ご承知のように宮崎県は早くから西都原古墳群を大切にしておられるわけですけども、これをさらに徹底的に調査し、その保存活用を図ろうということで、事業を展開しておられます。それに伴いまして、西都原古墳群の調査研究、これが今日シンポジウムに出ておられます北郷さんなどを中心に意欲的に進められまして、西都原古墳群の実態も非常にはっきりわかってきました。さらにもう一つは、先ほどご紹介いただきましたように、宮崎市が生目古墳群の調査を始められて、生目古墳群の実態がはっきりしてきた。さらに、お隣の鹿児島県では、薩摩半島は基本的には古墳はないところなんですけども、大隅の方は早くから多くの前方後円墳などがあることが知られております。この大隅の古墳についても、これ何年前になりますかね、10 年近く前になるかもしれませんが、橋本達也さんが鹿児島大学に赴任されて、大隅の古墳を綿密に調査研究されました。そういうことが重なって、ここ 20 年程の間に南九州の古墳の実態がきわめてはっきりしてきたわけです。

この日向の地に北部九州や中部九州に見られないような巨大な前方後円墳があるということは早くから知られていたわけです。具体的に申しますと、古墳時代の中頃、五世紀前後の西都原古墳群の女狭穂塚古墳という長さ 180mの大前方後円墳と、男狭穂塚古墳という長さ 175mの帆立貝式の古墳です。北部九州、中部九州で最大の前方後円墳というのは、福岡県の八女市にあります岩戸山古墳です。これは皆さんご承知と思いますが、おそらく６世紀前半、継体天皇の時に、ヤマトと争った筑紫君磐井の墓ではないかと考えられていますが、これが北部九州、中部九州では古墳時代を通じて最大の古墳でありまして、その墳丘の長さが 138mの大きな前方後円墳であります。ところが西都原古墳群には、女狭穂塚古墳が 180m、男狭穂塚古墳が 175m、それよりも一回りも二回りも大きな前方後円墳がある。このことは早くから知られていたわけです。

ところが、さきに申しましたように、柳沢先生がこの宮崎の古墳を見直す中で、宮崎市の生目古墳群に注目されました。生目古墳群の中に大きな前方後円墳があることは前から知られていたんですが、実は生目古墳群のいくつかの前方後円墳は、西都原の男狭穂塚古墳や女狭穂塚古墳よ

りも古い時代、墳丘の形などからみると古墳時代前期に遡るものであると考えるほかない、ということを注意されたわけです。20 数年前になりますが、私も柳沢先生にそのことを教えていただいて、まだ生目古墳群の本格的な調査が始まる前でありますけども、ご案内いただいて驚いたのを記憶しております。

こうして、この日向南部には、古墳時代前期の段階から、九州で最大の前期前方後円墳である生目３号墳、あるいは生目１号墳というような古墳があるんだということが明らかになってきたわけです。さらに、鹿児島県の大隅地域についても、志布志湾岸に唐仁大塚古墳という非常に大きな前方後円墳があることは前からわかっていました。しかし、これはおそらく中期の女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳と並行する時期であると考えられていたんですが、橋本達也さんが再検討された結果、これは前期の終わりぐらいまで遡る、西都原古墳群の女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳より古いということを明らかにされたんですね。そうすると大隅にも 150mという、岩戸山古墳よりも一回り大きな古墳が、前期の終わりごろに既に造られていたというようなことが、知られるようになってきたわけです。そういうことで、西都原古墳群の男狭穂塚古墳や女狭穂塚古墳だけではなくて、南九州の各地に、それぞれの時期としては九州で最大の前方後円墳が、営まれているということが確実になってきたわけであります。ここでは、こうした日向や大隅にそれぞれの時期としては九州で最大の大型前方後円墳が営まれることの意味、歴史的な意味を考えてみたいと思います。

一応簡単に、それぞれ大きな古墳の状況をご説明しておきたいと思います。今日は西都原古墳群について詳しくお話ししている時間はありませんが、ご承知のように大正初期に、当時の有吉知事が提唱されまして、この西都原古墳群の本格的な学術調査を、東京や関西から多くの考古学や歴史学の研究者を呼んで調査をされ、その実態がはっきりしたわけです。女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳は、一ツ瀬川を見下ろす台地の上にあるわけですが、その台地の中でも少し奥まったところにあります。ここでは、台地の縁辺に沢山の前方後円墳が営まれておりまして、これは古墳時代の前期から、いくつかのグループに分かれてこういう古墳が営まれている。これは北郷さんのご見解では、この地域の幾つかの政治集団がここにそれぞれ共同墓地を台地上に営んだものだと。それが中期になりますと、少し奥まったところにこの男狭穂塚古墳、女狭穂塚古墳という巨大な古墳が現れるわけです。ご承知のようにこの二つの大きな古墳は宮内庁が、陵墓参考地として管理しておられるわけですけれども、図 10 は宮崎県が宮内庁と協議されまして、精密な測量調査を実施されたわけです。その成果がそこに示しているものです。これで、それぞれの古墳の形はよくおわかり頂けると思いますが、このうち、数字の上で一番大きなものは、南の方にございます女狭穂塚古墳という非常に形の綺麗な三段築成の前方後円墳、これは墳丘の長さだけでも 180mあるわけです。周りに周溝を巡らしています。

それから、その北側にあるのが男狭穂塚古墳です。これは、前方部と申しますか、南の方に短い前方部のようなものが伸びているわけですが、その実態は、従来よく分からなかったんですね。かつては、宇都宮大学におられた石部正志先生は、これは南九州独特の非常に長い前方部を持った、柄鏡式の前方後円墳、江戸時代の鏡の長い柄のように細長い前方部をもった、これは西都原

古墳群などにも沢山ございますが、そういう柄鏡式の前方後円墳があったんだと。ところがその後に畿内型の女狭穂塚古墳が南に造られ、その女狭穂塚古墳の造営によって前方部が破壊されて、その残骸がこういう形で残っているのではないかという、非常に面白い仮説をお出しになったことがあります。しかしその後の調査で、どうもそういうことではないらしい。南の方に細長い前方部の残丘のようなものが残っておりますが、これは宮内庁の人達の観察調査によると新しい盛り土であって、これは前方部ではないと。前方部はごく短い造り出しが南の方についているだけだと、最近ではですね、これは帆立貝式の古墳であるということで、墳丘の長さはだいたい175mぐらいということになっております。ただこの古墳の後円部といいますか、円丘の直径が132mあるんですね、南の女狭穂塚古墳は、後円部の直径が 96mしかないわけです。ですから中心的な埋葬施設のある円丘で比較すると、女狭穂塚よりも男狭穂塚のほうが遥に大きい。それからその外側に、きわめて大きな空堀ですが、二重の空堀が巡らされている。非常に立派な古墳であるということが、この図からもお分かりいただけると思います。この円丘部が 132mということになりますと、だいたい220m級の前方後円墳となるわけで、まさに大王墓に匹敵するような、非常に巨大な円丘を持った大古墳であるということがわかってきているわけです。

問題はその造営時期でありますけれども、これについては、最近では埴輪の年代研究が進んで参りまして、こうした古墳の年代も発掘をしなくても、採集されている円筒

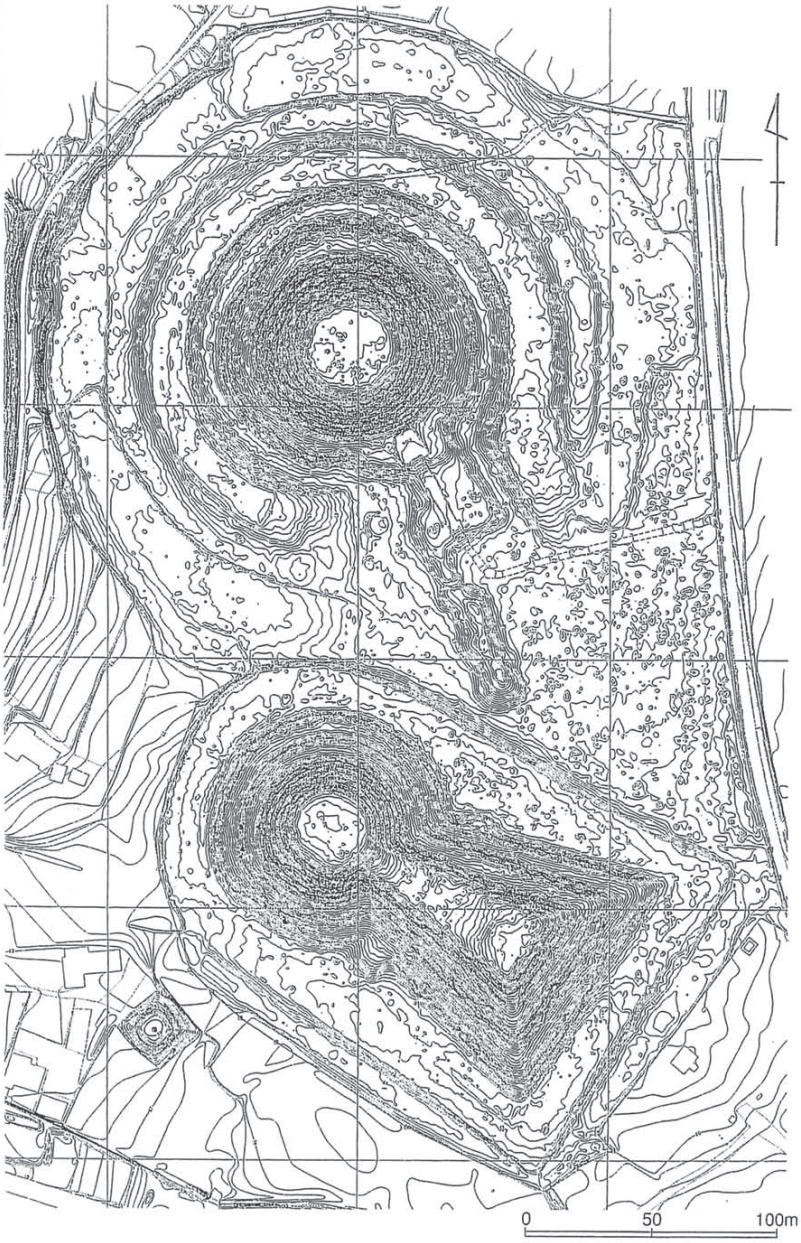


図 10　男狭穂塚古墳・女狭穂塚古墳測量図
（宮崎県教育委員会原図）

埴輪から、だいたい検討がつくわけであります。詳しくお話ししている時間はございませんが、この男狭穂塚古墳につきましては、古い要素の円筒埴輪をもっているわけです。これはちょっと専門的な話で恐縮ですが、円筒のおおよその形を作ってですね、その形を整えるのに外面を調整するわけですが、板状の工具で外面を擦ってだいたいの形を整えるわけです。この男狭穂塚古墳の円筒埴輪は、縦ハケが顕著に残っているわけです。

それに対して、女狭穂塚古墳の埴輪には横ハケがみられる。円筒埴輪にはタガという突帯が何段か付いておりますが、そのタガとタガとの間を更に丁寧に、横に擦って調整するようになってきます。その横ハケが残っている。それも畿内の中期古墳に顕著なＢ種横ハケといっておりますが、特殊な調整法を用いた横ハケが残っている。畿内の埴輪作りの影響を受けたことの明らかなものがこの女狭穂塚では見つかっているわけです。これは畿内の古墳でいいますと、４世紀の終わりから５世紀の前半にかけて、中期初頭から前半にかけての時期の埴輪が、この女狭穂塚古墳からも見つかっているわけです。それからここには形象埴輪もありまして、家、楯、蓋、あるいは短甲などの埴輪があるんですが、その短甲の埴輪の中に三角板を革綴じした短甲が、４世紀の終わりから５世紀の初頭頃に盛んに使われるわけですけれども、その古い三角板革綴短甲を模した埴輪がここから採取されている。そういうことから、女狭穂塚古墳の時期というのは、どう考えても５世紀でもきわめて早い段階のものであることが疑えないということになってきているわけです。

それに対してこの男狭穂塚古墳の埴輪は、そういう畿内の影響を受けていない、その特殊な、勿論畿内にも縦ハケあるんですけども、少し特異な円筒埴輪を持っておりまして、その年代決定はなかなか難しい。これは宮崎県が、大阪大谷大学の教授をしておられる犬木努さんに、男狭穂塚古墳、女狭穂塚古墳の横にあります陪塚的な古墳の調査を依頼されまして、犬木さんが発掘調査を担当されて埴輪の資料を沢山得られたわけです。犬木さんは非常に慎重で、この縦ハケの顕著な男狭穂塚古墳と、それからＢ種横ハケなどのある女狭穂塚古墳の前後関係は、厳密には決め難いと言っておられます。彼は埴輪のすぐれた研究者で、その意見は尊重されなければなりませんが、ただ常識的に言えばで、何れの地域でも古い段階は縦ハケ調整だけだったものが、ある段階から横ハケ調整を加えるようになってくるわけであって、やはりここでも私は男狭穂塚古墳の方が古くて、それに継いで女狭穂塚古墳が営まれたんであろうと思っております。従っておそらく４世紀末ないし５世紀初頭ぐらいに男狭穂塚古墳が造られ、それに続いて５世紀前半の早い段階に女狭穂塚古墳が造られたことはほぼ間違いないだろうというふうに私は考えております。

それからもう一つ重要なのは、日向南部には前期の段階から、大きな前方後円墳があるということが、柳沢先生の研究やあるいは最近の宮崎市の生目古墳群の調査で明らかになったわけです。図２に生目古墳群の分布図がございます。ここで問題になるのは、この一番大きな３号墳、かつては 143mと報告されておりましたが、最近の調査では、先ほどの話では 137mですか、何れにしてもほぼ岩戸山古墳に匹敵する九州で最大級の大前方後円墳が、すでに古墳時代前期に営まれていた。その年代は、おそらく４世紀の後半ということで、これは大きな間違いはな

いと思われます。

それからさらに北に１号墳というのがあります。この１号墳については、従来これも 138mぐらいと報告されていたんですが、最近の調査の結果少し小さくなって、120mあまりというふうに、今回のレジメでは報告されております。従来はおそらく３号墳よりも古いだろうと考えられていたんですが、先程のご報告では、１号墳の時期はやや新しいのではないかと、そういう問題が提起されているようで、最新の調査研究の成果を私よく存じませんので、何とも言えませんが、ただ拝見した限りでは、この前方後円墳の形態は非常に古い形をしております。

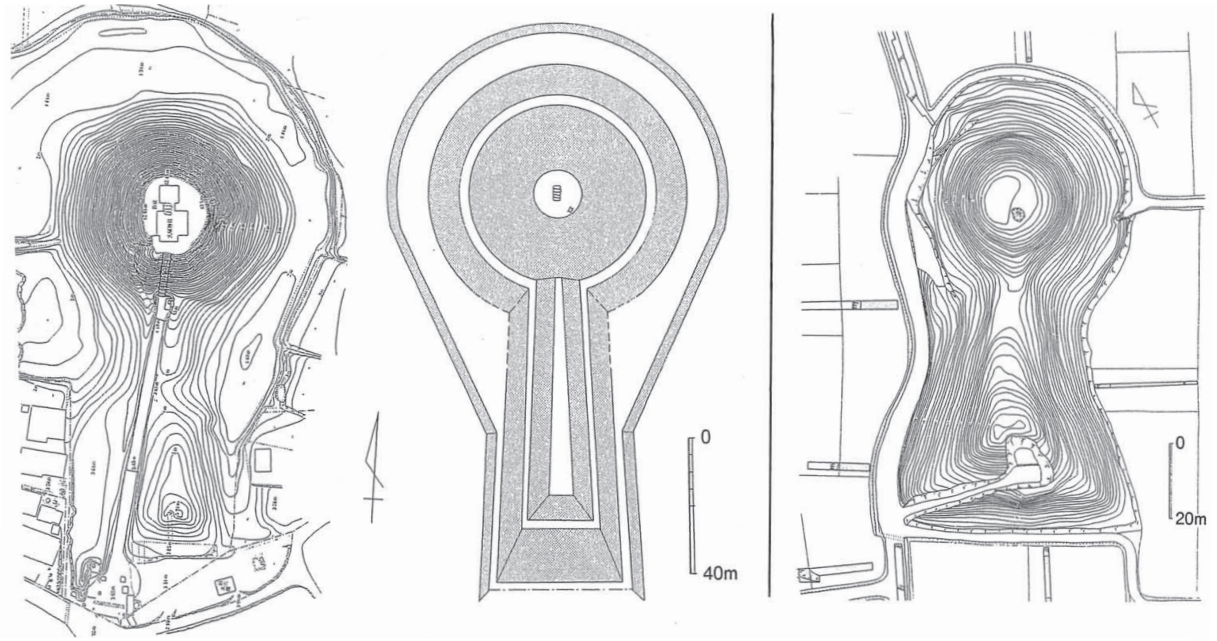
それから先程のスライドでもお分かりいただけますように、見事に葺石が施されているわけです。これは畿内でも、おそらく畿内で最古の大型前方後円墳は奈良県桜井市の箸墓古墳という古墳ですけれども、これは本格的な調査はされておりませんが、非常に丁寧に葺石を施してあり、後円部の最上段まで見事な葺石が施されているらしい。それから墳頂部やあるいは墳丘の各段のテラスの上にも石敷きなどが施されている。まさに外から見れば積石塚と見てもいいような、見事な葺石が施されていることがわかっております。最近、京都府向日市の五塚原古墳の調査を向日市教育委員会が実施されましたけれども、ここでも葺石が見事に出ておりまして、これは墳丘の形態が箸墓古墳に極めて近いことが最近の調査で確認されております。やはり古墳時代前期初頭の、最も古い段階の古墳ですが、葺石を非常に丁寧に葺くわけです。そういう点からも私はやはり１号墳は３号墳より古いのではないかと思います。これは今後の宮崎市の調査を待つほかないわけですが、１号墳の問題は別にいたしましても、３号墳という明らかに前期に遡る４世紀後半頃の大前方後円墳が日向の地に営まれているということは疑いない事実ということになるわけです。

それからもう一つ重要なのは大隅の唐仁大塚古墳です。図 11 に鹿児島県東串良町の唐仁大塚古墳の測量図とそれの想定復元図を示しておきました。これは鹿児島大学におられる橋本達也さんが想定された復元ですが、おそらくこういう形であったのだろうと私も思います。橋本さんは本来の墳丘の長さを 154mというふうに復元しておられます。この古墳は早くから、後円部に埋葬施設があることがわかっており、竪穴式石室の中に舟形石棺が納められて、遺物が一部残っていたわけです。その中に、従来は鋲留短甲が含まれていると報告されていました。しかし、橋本さんは甲冑の専門家でもあるのですが、その資料を再検討されたところ、これは鋲留短甲ではなくて、長方板を革綴した、非常に古いタイプの短甲であるということを明らかにされたわけです。ということになってくると、唐仁大塚古墳という岩戸山古墳よりも一回りも大きな大前方後円墳が古墳時代前期の終わり頃には営まれていた。人によって前期と中期の境をどこに置くかは違いますので、中期初頭と考える人もおられますが、何れにしても４世紀の後半から末葉には、南九州の大隅の地域に墳丘の長さが 150mというような大前方後円墳が営まれているという事実は疑えなくなってきているわけです。それからこの大隅の志布志湾岸にはもう１基大きな前方後円墳があります。それは大崎町にある横瀬古墳です。これはその測量図からも綺麗な前方後円墳であることがおわかりいただけますが、墳丘の長さがだいたい 140mです。これもまた九州では最大級の前方後円墳。これは埴輪が採取されておりまして、畿内でも５世紀中葉以降の、古

墳時代中期中葉くらいに出てくる埴輪をもっております。須恵器も出ておりまして、それらから横瀬古墳の年代は５世紀の中頃のものと考えて大きな間違いはないだろうというふうに考えられるわけです。このように、南九州各地の研究者のご努力によりまして、南九州の大型古墳の実態が非常にはっきりしてきたということになるわけです。

その結果を整理するとどういうことになるかということですが、図 12 をご覧下さい。そこに、橋本達也さんが最近おまとめになった、南九州における大型古墳における編年図を挙げておきました。これは柳沢一男先生が、宮崎に来られて再検討を加えられて、そしてこうした編年図をまとめられたわけですが、それをもとに、最近の橋本さんの調査研究の成果を踏まえて、修正されたものです。ですからこれは柳沢・橋本編年といっていいと思いますが、こういうふうにそれぞれの地域の大きな前方後円墳の造営年代が整理されているわけであります。それをご覧頂きますと、ひときわ大きな古墳が幾つかあるわけですね。それは古いほうから言いますと、生目古墳群の１号墳、この年代に若干問題があるということは、先程お話ししたとおりでして、これは今後の調査を待つ他ありません。それからその次にくるのは生目３号墳ですね、これはこの位置付けで大きな間違いはないと思います。４世紀の中葉から後半です。古い段階ではこの２つがずば抜けて大きいということがおわかりいただけると思います。

それから、この日向の西都原古墳群に、男狭穂塚古墳や女狭穂塚古墳が出てくるまでの間の時期に、大隅の志布志湾岸の肝属平野には唐仁大塚古墳という 154mの大前方後円墳が造られている。それに引き続いて、男狭穂塚古墳それから女狭穂塚古墳が、５世紀前半に造られる。そしてその後、５世紀の中頃になると、今度はまた志布志湾岸に横瀬古墳が営まれる、いうことがほぼ疑いなくなってきたわけであります。生目１号墳の問題はちょっと横に置いておきますと、生目３号墳、それから唐仁大塚古墳、男狭穂塚古墳、女狭穂塚古墳、横瀬古墳、この編年的な位置



唐仁大塚古墳測量図　　唐仁大塚古墳墳丘復元図（橋本達也氏による）　　横瀬古墳測量図

図 11　大隅の大型古墳

付けは、大きくは間違っていないというふうに私も考えておりまして、これはまず信頼していただいていいだろうというふうに思うわけであります。

ここで、私が非常に面白いと思いますのは、これらで、140m以上の九州では最大級の大前方後円墳が、生目１号墳は別にしますと、５基あるわけですね。生目３号墳、唐仁大塚古墳、男狭穂塚古墳、女狭穂塚古墳、横瀬古墳の５基があるわけですが、これらはそれぞれの古墳が営まれている周辺地域の首長墓と考えるには余りにも大きすぎる訳です。100m程度の前方後円墳であれば、これは宮崎県各地にも沢山ございまして、それぞれの時期に、それぐらいの前方後円墳を宮崎各地の政治集団の首長達が造っていたことがわかっております。この５基はそれらよりも一回りも二回りも大きいわけです。従って、これらの古墳はそれぞれの古墳が営まれている地域の政治集団の首長墓と考えるには余りにも大きすぎるということです。それからもう一つ面白いのは、その造営時期が何れも少しずつ異なっておって、同時期と考えられるものは一つも見当たらないということです。これはどういうことかといいますと、この時期、４世紀中葉ないし後半から５世紀中頃まで、日向南部と大隅地域の首長達の間に、地域的な政治連合、地域的な首長連合が形成されていた。一つの政治的まとまりを日向南部と大隅地域の首長達が造りあげていったのではないかと。これらの大型古墳は、南九州連合ともいうべき首長連合の盟主、リーダーの墓に他ならないのではないかというふうに私は考えるわけであります。

こういった事例は、この南九州の例だけだと疑問をいだかれる方も少なくないかも分かりませんが、日本列島の各地で見られるわけです。例えば岡山県を中心とする吉備地方ですね、吉備地

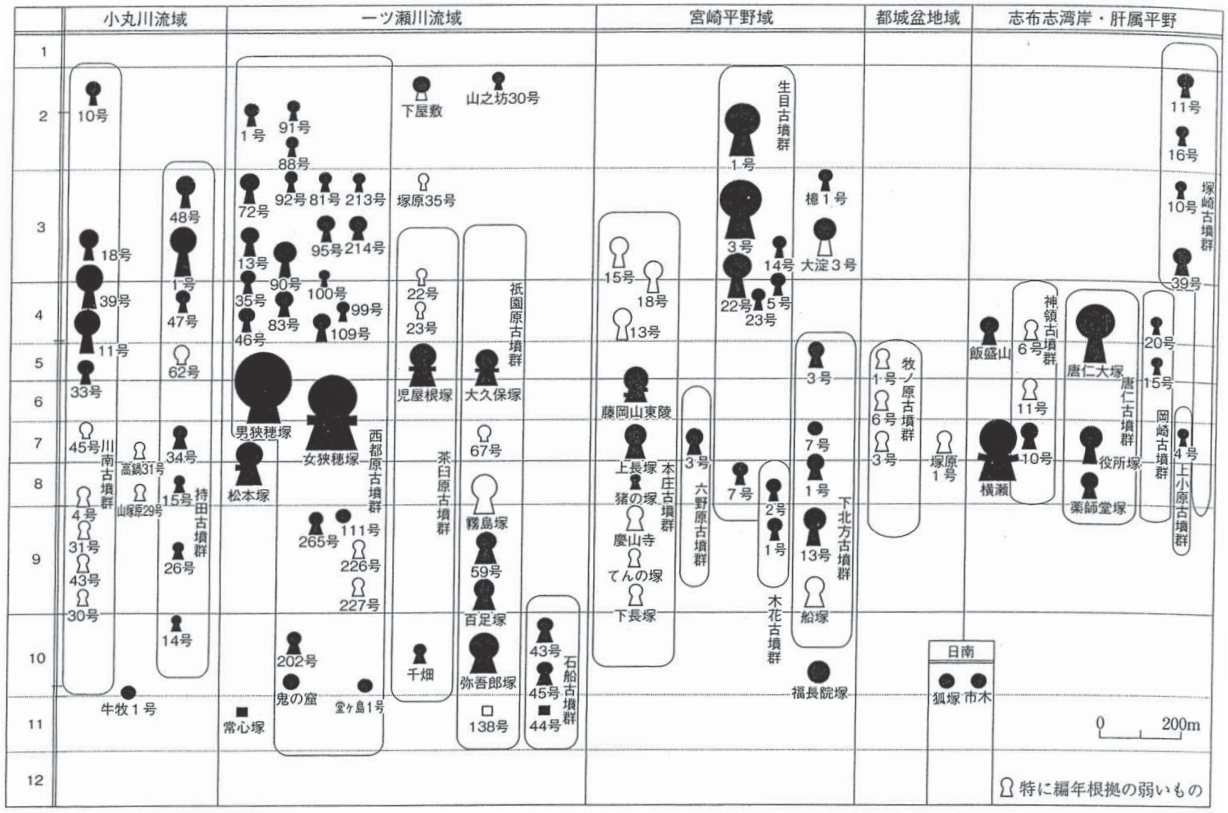


図 12　南九州における大型古墳の編年（橋本達也氏による）

方には吉備氏という強力な豪族が５世紀段階にいたことが知られておりますけれども、これも、実は吉備各地の、備前・備中・備後・美作の有力な政治集団が連合して、まさに吉備政権ともいうべき一つの政治的まとまりを造りあげていた。そしてそのリーダーが、５世紀段階には有名な岡山市の造山古墳、それからその近くにあります総社市の作山古墳という、畿内の大王墓にも匹敵するような古墳を造っていったと考えられるわけです。まさにそれは、吉備各地の政治集団の連合体、すなわち吉備政権の大首長墓に他ならないのではないかということです。これは戦後早い時期に西川宏先生という方が、吉備政権論という論文をお書きになって明らかにしておられたところで、基本的にはその考えは、間違ってないと思います。

さらに奈良盆地の西南部に葛城地域というところがありますが、この葛城地域の古墳を見ても、墳丘の長さが 200mを超えるような大王墓級の前方後円墳が沢山あるわけですが、それらは、葛城各地の 5 つほどの古墳群に分かれて、それぞれ１、２基ずつ営まれているわけです。これもまた、葛城各地域の首長墓と考えるには余りにも大きすぎる。しかもそれは一つとして同時期のものがないわけです。そういうことから私は、葛城地域においても葛城各地の５つほどの有力な集団が首長連合を形成していた。そして、その盟主の地位には、それらの集団が交替でつくと。そういう政治体制を想定せざるを得ないわけで、葛城政権ともいうべき、地域的な首長連合が形成されていたことが知られているわけです。こういう例は他にもいくつもあるわけでありまして、まさに南九州にも日向南部から大隅の地域にかけて、広域の首長連合が形成されていたと考えなければ、これらの前期中期のこの地域の大型古墳の在り方は説明がつかないのではないかと私は考えるわけです。

こういう考え方は、私だけではなくて、例えば鹿児島県の研究者ですが、池畑耕一さんという方がおられますが、この方が最近、同成社という本屋さんから出ました『古墳時代研究の現状と課題』という本の中で、この南九州の古墳を再検討されまして、やはり同じようなことを指摘しておられるわけです。池畑さんは大隅に唐仁大塚古墳と横瀬古墳という巨大前方後円墳があるわけですが、それらの時代が少し空きすぎている。この唐仁大塚古墳と横瀬古墳の間に西都原古墳群の男狭穂塚古墳と女狭穂塚古墳が入るということから、やはりこれら大隅と日向の集団の間に広域の政治連合が出来あがっていたのではないかということを指摘しておられます。池畑さんは生目古墳群のことについてはその論文では触れておられませんけれども、おそらく同じようなお考えではないかと思うわけです。

もう一つの大きな問題は、朝鮮半島や中国大陸との交渉・交易に大きな役割を果たしてきた北部九州、あるいは中部九州には認められない広域の政治連合が、どうしてこの南九州に形成されたのかという問題です。これはきわめて難しい問題でありますけれども、私はこれはいわゆるヤマト政権と言われる広域の政治連合の形成の契機と関係しているのではないかと考えています。

先程のお話にもございましたけれども、古墳時代というのは、畿内の大和や河内の大首長、これが後に大王とか天皇と呼ばれることになるわけですが、この大和や河内の大首長を中心に日本列島各地の政治集団の首長たちが政治連合を形成していた時代、広域の首長連合を形成していた時代というふうに捉えられているわけです。これをヤマト政権と言っています。そしてこのヤマ

ト政権と呼ばれる政治体制の政治秩序と古墳の造営とは密接な関係を持っていたものと考えられています。ヤマト政権に加わった日本列島各地の首長達がヤマト政権の中での身分秩序に応じて、大小様々な前方後円墳を造った。それがまさに古墳時代ではないか、というふうに考えられているわけです。

古墳には色々な形がありますが、大きな古墳は殆ど前方後円墳です。日本列島で営まれた古墳を墳丘規模の順にずっと並べてみますと、1番から 46 番か 47 番までは全部前方後円墳です。47 番目ぐらいに前方後方墳が一つ入ってくるんですが、その後はまた、前方後円墳がずっと並ぶわけです。ですから、古墳時代、日本列島各地で営まれた巨大な古墳は、ほとんどが前方後円墳なんですね。言いかえれば古墳時代の各地の有力な支配者層、有力な首長達は何れも前方後円墳を造っていたわけです。そしてその規模は、その首長がヤマト政権と呼ばれる政治秩序の中で占めた位置、身分的な位置を示すものだというふうに考えられています。

古墳時代とはそういう時代なんですが、3世紀の中葉過ぎになると、西は九州から、東はおそらく関東から東北南部ぐらいまでの範囲、この範囲にヤマト政権と呼ばれる広域の首長連合が形成されたことは疑いないと考えています。問題はこの広域の政治連合がどうして形成されたのか。このヤマト政権と呼ばれる広域の政治連合形成の契機、きっかけが南九州に広域の政治連合が生まれ、そしてそこに大きな古墳が残されることになったということと、関係しているというふうに私は考えております。

最近の古墳研究の進展の結果、古墳の出現の年代は非常に古く考えられるようになりました。かつてこういった大きな前方後円墳が出てくるのは4世紀の初めぐらいと、私どもが考古学の勉強を始めた 50 年前ぐらい前には考えられていました。これは京都大学においでになった小林行雄先生のお考えであったたわけです。しかしながら、どうもそういう定型化した大型前方後円墳が出てくるのが4世紀初め、遡っても3世紀末というのはちょっと新しすぎるのではないかと。それから古墳時代中期になると、朝鮮半島の陶質土器の影響を受けた新しい焼き物の技術が日本にも伝えられて、須恵器生産が始まります。これは中期の第2段階から始まるわけですけれども、その須恵器生産が始まる時期も、私どもが考古学の勉強を始めた頃には、5世紀の中頃だと言われていたんですね。しかし色々検討してみると、これについてもどうも新しすぎる。須恵器の出現の時期についても、前方後円墳の成立時期についても 50 年ぐらい間違っているんではないかというふうに私どもは考え始めたわけであります。その後研究が進展致しまして、やはり小林先生のお考えは 50 年ぐらい新しく考えすぎていたということは、最近では研究者の意見はほぼ一致しています。大まかには、古墳の出現は3世紀の中頃ないし、半ば過ぎ、と考えられるようになってきているわけで、その段階には畿内の勢力を中心にヤマト政権と呼ばれる、広域の政治連合が日本列島の中央部に形成されていたことは疑えないわけです。

どうしてこの時期に広域の政治連合ができあがったか、これが大きな問題になるわけです。『魏志』倭人伝に書かれております、卑弥呼が活躍した邪馬台国の時代というのは、まさに3世紀前半ですから、そして『魏志』倭人伝によりますと、正始8年、247 年の記事に続いて「卑弥呼以って死す」ということが書かれているわけです。卑弥呼が亡くなったのは3世紀の中頃ですね。そ

の直後には巨大な大前方後円墳が現れているわけです。そのことから、やはり邪馬台国は大和と考えざるを得ないのではないかというふうに多くの考古学研究者は考えるようにはなってきているわけです。ですから、初期ヤマト政権は、いわゆる邪馬台国連合から繋がるものであることは間違いないと思いますが、必ずしもそのまま繋がったとは思えないわけです。今日はそのことについて詳しくお話する時間はございませんが、邪馬台国連合というのは、おそらく畿内から西の地域、畿内から瀬戸内海沿岸各地、それから北部九州の地域に形成された広域の首長連合であろうと思います。『魏志』倭人伝によりますと、邪馬台国を初めとして 29 の小国が卑弥呼の邪馬台国を中心に小国連合を形成していたことが読み取れるわけです。

その範囲はおそらく畿内から西の瀬戸内海沿岸各地と北部九州が中心であったんだろうと私は考えております。そしてその時期には、畿内以東の地域にも西の邪馬台国連合と同じような政治連合が出来ていたと思います。私はこの東にあった東方の政治連合を狗奴国連合と考えております。卑弥呼の晩年、邪馬台国は狗奴国という国と戦争をしています。この狗奴国というのは大変な強敵であったようで、邪馬台国は何らかの軍事的な援助を魏に要請するために、魏の植民地であった帯方郡にわざわざ使いを送ってその戦争の状況を報告しているわけです。その狗奴国がどこにあったかわかりませんが、邪馬台国ヤマト説をとればやはり狗奴国の位置は南と書いてありますから、これは東と読みかえざるを得ないわけです。そうすると畿内より東の地域で、邪馬台国ないし邪馬台国連合と対等に戦えるような勢力というのは、私は濃尾平野、伊勢湾岸しかあり得ないと考えています。おそらくそこに狗奴国という国があって、その狗奴国を中心に東日本の全ての地域ではありませんが、東日本のいくつかの拠点に成立していた小国が連合して、西の邪馬台国連合と同じような狗奴国連合ともいうべき政治連合を形成したと考えているわけです。

これが、卑弥呼の晩年、邪馬台国と衝突します。そのどちらが勝ったかということは、『魏志』倭人伝には書かれておりませんが、その後の歴史の流れからいって、おそらく西の邪馬台国連合側の勝利に終わったことはまず間違いないと思われるわけです。こうして日本列島の中央部に初めて、西は九州から東は関東、あるいは東北南部に及ぶような一つの政治的まとまりが出来あがるわけです。これを私は初期ヤマト政権と理解しています。何れにしても、この初期ヤマト政権というのは、そういう意味で邪馬台国連合から繋がっていることは間違いありません。

問題はこの邪馬台国連合がどうして、２世紀の終わりか３世紀の初め頃形成されることになったのかという点です。これはきわめて難しい問題ですが、私はこれはおそらく、当時非常に重要になって参りました鉄資源の問題が密接に関連していると考えています。日本列島では弥生時代のある段階、前期の終わりぐらいから鉄器時代に入ります。ただ弥生時代の中期の段階では、勿論鉄器はあるんですが、まだ石器も盛んに使われておりまして、これは九州でも瀬戸内沿岸でも畿内でもそうですが、中期の遺跡を掘ると大量の石器が出てくるわけです。ところが弥生時代の後期、西暦１、２世紀になりますと、基本的には石器は姿を消してしまいます。これは本格的な鉄の時代になったということを示しているわけです。ところが、何故か不思議な事に日本列島では、これだけ発掘調査をしておりますが、未だに鉄鉱石や砂鉄を製錬して鉄を採る、製鉄遺跡が見つからないわけです。ようやく６世紀になって、日本でも製鉄が始まったことが発掘調査で明

らかにされています。

それでは当時の倭人はどうやって鉄を入手していたのか。これは朝鮮半島の東南部の弁辰というところにいい鉄が採れる場所がありました。近くにいい鉄の産地があったので、日本ではそこの鉄を手に入れていたということのようです。その弁辰、のちの伽耶ですが、弁辰の鉄を手に入れるのに中心的な役割を果たしていたのは、言うまでもなく玄界灘沿岸の末盧国とか伊都国とか奴国というような地域であったことは間違いないわけです。ですから、瀬戸内海沿岸各地や畿内の勢力が鉄資源を手に入れようとすると、玄界灘沿岸に頭を下げて、高価な代償を払わないと鉄資源を分けてもらえない。これではいつまでたっても、鉄の安定的な確保は望めないわけです。おそらく、そのためにこの瀬戸内海沿岸各地から畿内の諸勢力が連合して、それまで鉄資源の輸入ルートを一手に支配していた玄界灘沿岸と戦うという事態がおそらくあったのではないか。鉄資源の輸入ルートの支配権を巡る争いが、おそらくあったんだろうと思います。その戦いに畿内瀬戸内連合が勝利を収めて、出来上がった広域の連合がまさに邪馬台国連合に他ならないと思うわけです。

おそらく東の狗奴国連合も、やはり鉄資源の安定的入手のために、東日本各地の政治勢力が結びついていたのではないか。そしてそれはおそらく、西の邪馬台国連合を通じて手に入れていたんだと考えています。何れにしても、その鉄資源の輸入ルートの支配権を巡る争いが、この日本列島における広域の政治連合を形成せしめる契機になったんだろうというふうに私は思っているわけです。ですから、ヤマト政権の中枢を担ったヤマトの王権にとって、北部九州というのは戦った相手なんです。これは絶えず警戒を必要とする地域なんです。ですからそのヤマト政権が、この北部九州のさらに南の南九州の勢力と結びつく可能性はきわめて大きいというふうに私は考えています。

この邪馬台国連合がそのままヤマト政権になったのではなくて、邪馬台国連合の時代には東方にも狗奴国連合ともいうべき東日本の広域の連合があった。その両者が合体してヤマト政権ができあがったということを先に申しました。初期ヤマト政権につながる邪馬台国連合は、その東方の狗奴国、私は濃尾平野だと思いますが、この狗奴国連合とも争っているわけです。その狗奴国連合を倒し、それと合体して初めて初期ヤマト政権はできるわけです。ですから、畿内ヤマトの勢力にとって、東の濃尾平野もこれまた警戒が必要な地域なんですね。濃尾平野というのは皆さんもご承知のように広大な平野をかかえている。大きな生産力を持った地域であるにもかかわらず、実はこの濃尾平野にもあまり大きな古墳はありません。ようやく、岩戸山古墳と同じ継体朝ぐらいになって、名古屋市に断夫山古墳という 150mぐらいの大前方後円墳が出現しますけれども、それ以前は濃尾平野も大きな平野であるにも関わらず、大きな古墳がなかった地域です。もっと大きな古墳がその背後の関東など東日本各地に沢山造られている。これは北部九州と南九州のあり方と同じことだと思うわけです。

そういうことで、初期ヤマト政権の前身である邪馬台国連合が形成されるのに際して、北部九州地域は、ヤマト政権のもとになる畿内瀬戸内連合とかつて戦った相手であって、警戒を要する地域であり、寧ろその背後の南九州と密接な関係をヤマト政権は持つようになったのではないか

と考えています。同じようなことは濃尾平野の場合についても言えるのではないかと思うわけです。そういうことから、ヤマト王権としては、この九州の中では南九州の地域を非常に大切にするといいますか、優遇するということがおそらくあって、北部九州や中部九州には形成されなかった広域の政治連合が、４世紀から５世紀中葉までの南九州に形成されることになったのではないかというふうに私は考えているわけであります。

なお、この広域の連合が日本列島に形成される契機を、鉄資源の入手ルートの支配権を巡る争いと結びつける考え方については、かつては考古学では大阪大学におられた都出比呂志先生、あるいは文献史学では立命館大学におられた山尾幸久先生など、私と同じような考え方の方は少なくなかったんですが、最近ではこれに対する批判は少なくありません。残念ながらこれは考古学的に実証されているわけではありません。あくまでも仮説です。ただ、それを批判する方は沢山おられるんですが、それではどうして３世紀の早い時点で、日本列島の中央部に、西は九州から畿内に至るような広域の連合が形成されることになったのか。それも先進的な北部九州に対して、後進的であった畿内を中心に邪馬台国連合や初期ヤマト政権が成立にすることになったのか。これについて納得できるような説明をしていただけないわけであって、私は自分が納得できる説が提起されれば、私の仮説などいつ引っ込めても構わないわけです。残念ながら今のところ、それに代わるような有力な仮説が出されているとは私には思えないわけで、やはりさきにお話ししたように考えざるを得ないのではないかと思います。そのことと、この南九州に広域の政治連合が出来あがったこととはおそらく無関係ではないだろうというのが私の考えであります。従ってこの問題は、ヤマト政権成立の前史と密接に関わっておるわけでありまして、この南九州の地が、王権発祥の地とされるのも、おそらくこのことと関係しているのではないかと私は考えております。

それでは、時間が参りましたので私の話はここまでにしておきます。どうもご静聴下さいましてありがとうございました。

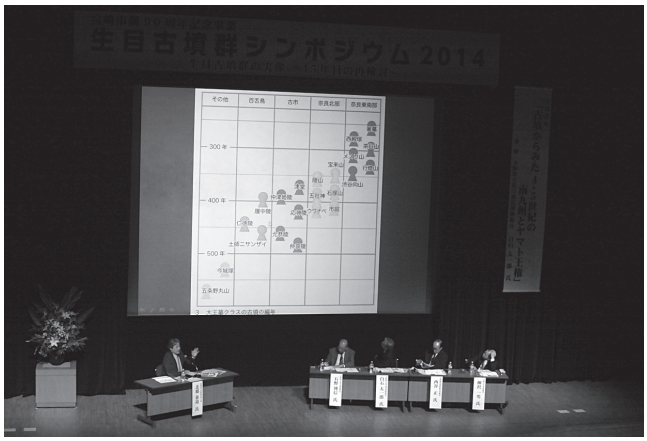
パネルディスカッション

パネリスト

兵庫県立考古博物館長　石野 博信　氏
大阪府立近つ飛鳥博物館長　白石 太一郎　氏
九州歴史資料館名誉館長　西谷 正　氏
宮崎大学名誉教授　柳沢 一男　氏

コーディネーター

宮崎県教育庁文化財課専門主幹　北郷 泰道　氏



北郷：こんにちは。最初のプロフィールのページを見ていただいてもわかるように、この中では私が一番若手でございます。最近では、年寄りの部類に入っているのですけども、ここでは一番若手ということで、先生方のお話を皆さんと一緒にお聞きしたいと思います。

先程、冒頭市長の挨拶の中にもありましたように、世界文化遺産という話題が昨年来上がっております。このことは、世界文化遺産にという形でのアドバルーンだとか、花火を上げるというよりも、まだ日本国内で世界文化遺産には、いわゆる古墳というジャンルはなっていないわけです。白石先生らが中心になって進められている「百舌鳥・古市古墳群」、大規模古墳の仁徳天皇陵だとか応神天皇陵と言われる古墳がある日本を代表する古墳群が暫定リスト入りしています。そして、もう一つ西谷先生が関わっていらっしゃる福岡県の「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」、沖ノ島という海の正倉院とも言われる祭祀遺跡が中心になって、そして構成遺産として宗像の古墳群を入れていくという形で、今二つ古墳関係の世界文化遺産が動こうとしています。それらを見ていきますと、じゃあ南九州の古墳というのは、世界的に見てどういう評価をうるべきものなのかという点について、少しじっくり考えてみたいなということで、丁度先週、第二回目でしたけれども、西都市でシンポジウムを開催したところです。おそらくこの会場の中には二週連続で来ていただいた方々もいらっしゃるかと思います。その中でも生目古墳群の位置付けというのが、先程来お話にありますように、15 年の成果というものではっきりしてきました。それと同時に多くの謎も出てきたということになります。

まず、シンポジウム議論を進める前に、先程ちょっと石村さんの報告の中にありましたけれども、この白石先生の最後の資料、これ鹿児島大学の橋本さんが作られた資料ですけれども、柳沢先生も同様の、といいますか同じような形での編年図を作られていますし、私もそういうことを考えてきました。まず生目古墳群について、要するに 4 世紀代と見る事が一つの前提として妥当であるのか、それと 1 、3、22 号墳というふうな一つの順序を考えてきたわけですけども、どうもこれについても調査をすればするだけ色んな事も分かってきますし、それと同時に修正もでてくるだろうというように、そういう段階にあるわけです。

その年代観を考える上で、幾つかの尺度があります。古墳の墳形の変化という物差しが一つありますし、そこから出てくる土器だとか埴輪だとかの物差しもあります。内部主体を掘れば埋葬主

体の在り方の変遷もありますし、副葬品の鏡というのは特別の時間尺を持つ副葬品として考えられます。そういう色んな時間尺を合わせながら一番メモリの合う、確からしいところに一つの古墳の年代を定めていく。そういう作業をやっていくわけです。その前提となる、今現在、生目古墳群の特に１、３、22 号墳、４世紀代というふうに私達考えてきましたけれども、その点についてつぶさに現地も確認され、そして指導されてきた柳沢先生にその辺りの整理をお話を頂ければと思います。

柳沢：はい。南九州の前期首長墓系譜を代表する生目古墳群は、先ほど石村さんからご説明のあったように 1999 年から 15 年にわたる確認調査によっていろいろなことが分かってきました。しかし、1990 年代の半ばまではあまり注目されることがなく、漠然と古墳時代中～後期に築造された首長墓群と理解されていました。

私は 1991 年にこちらに赴任したのですが、宮崎の古墳や古墳群についてまったくの無知で、それまでの研究成果に学びながら、可能な限り現地を見て回ることを心がけました。生目古墳群に初めて足を踏み入れたのは 1993 年の年末のことだったと記憶しています。なかでも、墳長が 100mを超える１・３・22 号墳には本当に圧倒されました。雑木林のため見通しがきかない状態でしたが、後円部と前方部の高さの違いから、これらは間違いなく４世紀代もしくは３世紀にさかのぼるかも知れない前期古墳だ、と確信しました。残念ながら、それを検証するための墳丘測量図の存在を知りませんでしたが、たまたま当時進められていた宮崎県史編纂事業の通信紙に、西都市出身の測量士であった原田仁さんが戦前に作成した高精度測量図が紹介されました。19 年ほど前になりますが、岸本直文（現、大阪市立大学）さんらが進められていた前方後円墳の墳形変化の研究に学びながら、宮崎県内の古墳時代前期の前方後円墳の編年研究を行い、生目古墳群では墳長が 100mを超える３基の大型前方後円墳を検討しました。詳細は略しますが、１号墳が奈良県箸墓古墳の 1/2、３号墳は同じく奈良県渋谷向山古墳（現・景行陵）の 1/2 の相似形墳と想定されることから、これらが３～４世紀代の前期にさかのぼること、そして前期に限れば西都原古墳群の前方後円墳よりも規模が大きい首長墓群である、という仮説を提出いたしました。

また、生目古墳群の調査が始まった 1999 年の 11 月、生目古墳群をめぐるシンポジウムの基調報告の際に、南九州の主要な古墳群における首長墓系譜の推移の編年図を提示し、古墳時代前期に限れば、生目古墳群の３基の大型前方後円墳は南九州最大の盟主的首長墓群であったと申し上げました。ただ残念なことに、生目古墳群の調査が始まったばかりで、私が取り上げた前方後円墳の築造時期を確定する確実な資料はありませんでした。

宮崎市教育委員会による 15 年にわたる生目古墳群の確認調査が始まって、新たに２基の前方後円墳が発見され、前方後円墳は９基と判明しました。それらの概要は先ほど石村さんがお話になったとおりで、調査前には築造年代がほとんど分からなかった５号墳や７号墳、そして 14 号墳の年代が確定したことなど、調査の成果はとても大きいものです。100mを超える大型前方後円墳の３号墳、22 号墳は、いずれも前期とみて間違いないという調査結果がでており、私としてもほっとしているところですが、新たに前方後円墳と確認された 21 号墳と９・33 号墳、そ

れに現在調査進行中の１号墳の調査成果から、以前の私の仮説を大きく訂正する必要が生じました。第一は、最古の前方後円墳はどれか、第二は生目古墳群の前方後円墳群は台地北側のグループと南側のグループの２系統に分かれるのではないか、というものです。

第一の生目古墳群における最古の前方後円墳は、確認調査によって前方後円墳と判明した 21 号墳と、現在調査中の９･33 号墳ではないか、と推測されます。21 号墳は、前方部が農道によって削平されていたのですが、調査の結果、墳長約 35m、後円部直径約 24mの規模が復元されました。墳丘表面に葺石が行われておらず、周堀も前方部隅角で収束する特徴をもち、４世紀を前後する頃の二重口縁の壺が出土しています。墳丘の周囲や周堀内にたくさんの地下式横穴墓が築造されていますが、それらは 21 号墳が築造されてから１世紀ほど後に造られたものです。現在調査中の９・33 号墳は、道路建設のために本来一つの前方後円墳が二つに分断されたもので、調査の結果から想定される墳形や葺石を伴わない築造技法は 21 号墳と類似しており、21 号墳のように４世紀を前後する時期にさかのぼる可能性が高いのではないかと考えています（以下、この前方後円墳は後円部名を取り、９号墳と呼びます）。

第二の前方後円墳群の２系統は、21 号墳の調査を担当された竹中克繁さんが、３年前に地元の鉱脈社から刊行された『生目古墳群と日向の古代史』のなかで、生目古墳群の前方後円墳群は台地の南側と北側で築造系譜を異にする二つのグループがある、と提起されたことに始まります。生目の前方後円墳群を複数系列の首長墓系譜で理解しようとする問題提起にショックを受けましたが、それまでの調査成果を改めて検討しますと、確かに竹中さんが提起されたように、生目の前方後円墳は二つの築造系譜に分かれる可能性が高いのではないか、と考えるに至りました。ただし、それにはクリアしなければならない問題があります。調査進行中の１号墳の築造年代です。かつて私は、その墳形が奈良県箸墓古墳との類似から、生目古墳群最古の前方後円墳と考えましたが、今年の確認調査で墳丘の段築構成が後円部・前方部とも３段と判明したことで、年代の手がかりが得られました。後円部・前方部とも３段築成された最古の前方後円墳は奈良県佐紀陵山古墳（現・日葉須媛陵）の可能性が高く、埴輪や出土した副葬品から４世紀中葉頃と推測されています。とすれば、１号墳は４世紀前～中葉と推測される３号墳よりも新しく、４世紀末葉と推測される５号墳よりも古いと想定されます。そうしますと、生目古墳群は、北側の１・３・５・７・９号墳の５基（N群）と、南側の 14･21･22･23 号墳の４基（S群）からなる二つのグループが、５世紀後葉に下る７号墳を除いてほぼ同時並行的に前方後円墳を築造したと理解することが可能になります（図 13）。

図の左側の 1999 と書いてある図面は 15 年前の編年案、右側が今回の改めて検討した結果たどり着いた編年案です。私は自説に拘らず、新たな調査成果や研究成果は正しければ積極的に取り入れることにしています。このように生目古墳群の首長墓が２系統に分かれたとしても、古墳時代前期の首長墓群として九州で最大規模あるという評価に変更を加える必要はありません。以上です。

北郷：ありがとうございました。

長年柳沢先生の編年の移り変わりというのをこれまでも見てきましたけれども、要するにその

時々といいますか、調査成果を元に修正、そして新しい整理をしていくというのは当然ですけれども、これもまた流動的なのでしょうかね。ほぼこの辺りで納まるのでしょうか。

柳沢：台地北側のN群は、５号墳と７号墳からは出土土器から図に示した位置を大きく動かないと思いますが、１号墳や３号墳、それに９号墳は、直接の築造年代をしめす土器が出土していないので、やや流動的だと思います。台地南側のＳ群の 21 号と 22 号は、出土土器からこの築造順序は確実です。23 号墳は発掘調査でも土器が出土していないのでよく分かりませんが、14 号墳の年代の位置付けから、22 号墳と 14 号墳の間に築造された可能性はきわめて高いでしょう。

北郷：ありがとうございます。

今、多くの畿内、奈良だとか大阪の古墳の名前等も出てきました。それからご質問の中にも生目の１号墳だとか３号墳、いわゆる墳形規格として畿内の大型古墳とどういう関係にあるのだろうという話で、箸墓古墳だとか、例えば３号墳については景行陵だとかというお話も出てきました。石野先生、文字通り畿内古墳の中枢地帯におられて研究を進められてきたわけですけれども、石野先生の目から見て、今柳沢さんの方から提起いただいた特に墳形の共通性の問題だとか、その点についてちょっとお教えいただけないでしょうか。

石野：私は漠然と九州の４世紀、古墳時代前期で一番大きい古墳は福岡にあるんだろうと思ってました。ところが宮崎には生目古墳群をはじめ４世紀の大型古墳がゴロゴロしています。漠然と九州の４世紀の大きい古墳は北部九州ぐらいにあると思っている人が多い中で、本当は違うんだ、宮崎なんだという、地元の皆さんにとっては当たり前のことが、ここ数年前から改めて注目されているということだと思います。

白石さんの講演を聞きながら、変だなと思いました。それは 24 ページに、柳沢さんが元を作られた編年表がありますが、それを見ながら白石さんの講演を聞いておったんですが、変なのは白石さんが変なんではなくて、私も多分変なわけではなくて、男狭穂塚古墳を造った人が変なのかなと改めてこの表を見て思いました。白石さんも言っておられたように、女狭穂塚古墳よりも遥かに大きな円丘部を

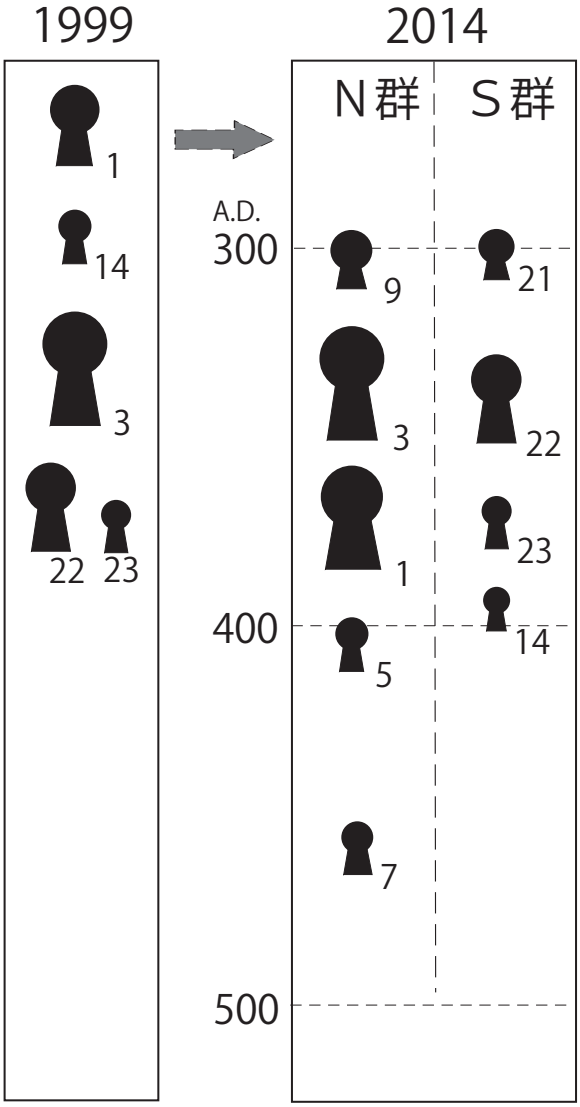


図 13 柳沢一男氏による生目古墳群の首長墓系譜

造っておりながら、方丘部を長く伸ばすいわゆる前方後円墳になっていません。

私は前方後円墳という用語は、古墳の前も後ろも分からんのに、この名称は間違いだと思っています。江戸時代の人が言いだした名称を検証せず使っているのはおかしい。長い突起をもった円墳だから長突円墳と呼ぶべきだと提案しています。

それは別にしまして、方丘部が短く円丘部はきわめて大きい、そういう墓を造るような人物が何故この時期にここへ突然現れたんだろう。その前には、大型の長突円墳が続いており、その後も女狭穂塚古墳を始め、長い突起を持った円丘墓が、歴代ずっと続いています。白石説によりますと日向から大隅にかけての連合政権の中で造り続けられている。それなのに男狭穂塚古墳の人物だけが、というのは一体何故なんだろうと不思議に思いました。

なおかつ女狭穂塚古墳が男狭穂塚古墳に一部重なるように造っている。これは以前からよく言われていることなんですけども、後の時代の人物が前の時代の、その地域の王に当たるような人物の墓に自分の墓を重ねて造るような極めて失礼な、とんでもないことをやってる。それが短い突起を持ったこの地域の王の墓の外側の線に自分の墓を造った。葬られている人はもう亡くなってますけども、一族が重ねて造るようなことをやっている。これは全国的に見て極めて異例です。こんなことをやっている人は他所にいない。そうすると、女狭穂塚古墳の被葬者はよそ者なのか。男狭穂塚古墳は在地の大豪族で、女狭穂塚古墳は墳丘の形からしても、きわめて近畿に近い形を持っていますからこれはおかしいんじゃないか。本当の在地の人物は男狭穂塚古墳なのかと話を聞きながら思いました。そう思ってみますと、女狭穂塚古墳にはくびれ部に造り出しがあります。南九州の茶臼原古墳群とか、祇園原古墳群とか、横瀬古墳など大型古墳のくびれ部に造り出しを造るような墓の造り方が広がってくる。男狭穂塚古墳と女狭穂塚古墳の間には何か大きな違いがあるような感じを受けます。

そう思って生目古墳群を見ますと、南九州の日向の地に大きな墓を造る一族が少なくとも２代、あるいは３代にわたってこの生目の地域で続いている。一体生目の人はその後どうなったのか。生目には７号墳がずっと下の方にありますが、円丘部の下に、竪穴石室とか小型石棺などの埋葬施設を作るのがよくあることなんですけれども、そうじゃなくて、地下式横穴墓という南九州独特の埋葬施設を持っている墓として復活してきている。地域の独自の文化がこの地域に、随分間が空いた後ですけども、復活してきている。そういう流れの中で、生目地域を考える必要があるのではないかと、改めて思いました。

北郷：次の課題のその地域での政権成立の在り方だとか、後ほど首長連合という話に及びたいと思いますけれども、今の石野先生のお話もどうもその生目の位置付けについては大枠としては４世紀代、ないしは５世紀初頭までの間に収まるだろうということで、その認識は共通の認識として持てるのではないかと思います。ただ個別については、これは最後にまた皆さん先生方にこれからの課題という点でご指摘いただきたいと思いますけれども、その詳細については色々詰めるべき点があるのだろうというふうに思います。

まず、そういう輪郭から押さえていくしかない部分が、まだ生目古墳群についてはあるのかもしれませんが、スライドの岩戸山を出してもらえませんか。これも同じように輪郭の話から

ということになるのですけども、白石先生のご講演の中でも岩戸山というお話がありました。これ説明板ですけれども、筑紫君磐井の墓だと、６世紀の前半の大古墳ということになります。一つの視野の中に全体像は入らないというような規模になるんですけども、非常に特徴的なのはこの別区といわれる石人、石馬、埴輪は土で作りますけれども、石造りの武人像だとかそういうものが配置されていました。そういう古墳であります。正に北部九州の王であり、そしてヤマト王権と最後の覇権を争うというのが「筑紫の乱」といわれるものになるというふうに考えるのですけども、前段階５世紀それから４世紀代では、先程来ご指摘があるように、北部九州には要するに大古墳といえるのが、見当たらないということになるわけです。４世紀・５世紀の北部九州の様相について、西谷先生の方からご発言頂けないでしょうか。

西谷：非常に大きな問題ですが、まず、前期４世紀を中心とした頃で申しますと、先程来お話が出てますように、この生目古墳群に 100mを超す前方後円墳が１つではなくて、３つという、いわば歴代３代にわたって築かれているというのは非常に特徴的なことだと思います。白石先生が関係しておられますが、先程も北郷さんからご紹介のあった世界文化遺産で「百舌鳥・古市古墳群」という準備が進んでいます。あまりにも古墳の数が多いので文化庁からちょっと絞り込めと言われましたが、その時の基準の一つがですね、全長 100m以上のものになったというふうに仄聞しています。それほど 100mを超すというのは大変なことなんですね。北部九州で申しますと、福岡平野でも一番古くて、大きな古墳というと、那珂八幡古墳がありますが、これが全長 75mとか 85mともいわれます。福岡平野でもその程度なんです。そこから、西に参りまして、佐賀県の唐津市に久里双水古墳という前方後円墳がございます。これは報告書では長さ 97mとなっていたと思うんですけども、私は102、3mと考えています。ともあれ100mですね。そして、東側でいいますと、瀬戸内海を真っ直ぐきて西に突き当たったところが福岡県の京都郡というところです。そこに石塚山古墳という前方後円墳がございまして、三角縁神獣鏡が 14 面出た古墳で知られます。そこが全長 110mあります。このように北部九州の初期、３世紀後半頃の前方後円墳と比較しても、ここの生目古墳群は突出しています。特に 100mを超す前方後円墳が３代にわたって３つもあるということは大変なことだと思います。

一方、最近、新潟市の北東の方向に胎内市というところがあって、そこで畿内型の色んな遺物である、武具の鞆であるとか、盤龍鏡が出たりして、畿内の古墳文化が及んだということで大変話題になっています。今まで能登辺りといわれていたのが、そこから 250 ㎞北まで、初期の古墳文化が及んでいるというわけです。これは長さが 41mの楕円形の古墳で城の山古墳といいます。他方太平洋側で言いますと、静岡県の沼津市に高尾山という古墳がございまして、これが長さ 46mの前方後方墳です。このように日本列島各地で、４世紀初期に前方後円墳、前方後方墳、あるいは方墳そして円墳などが築かれていますが、いずれも 100m以下の古墳です。先程冒頭の石村さんの説明にあった通りですけれども、地域首長が、そのような首長墓を営んでいくんですね。その中にあって、北部九州との比較においてもそうですが、４世紀に３つの首長系列墓群があるというのは大変なことですね。生目古墳群の１号墳がちょっと新しい、というお話で少し残念ですが、それはともかくとしても、これはやはりこの地域の重要性ですね、一つはやっぱり

地域力と申しましょうか、ここに旧石器・縄文時代以来の地域社会があって、やはり宮崎平野を控えて生産力の問題などもありましょう。もう一つは、一つの解釈として先程の講演の中で、白石先生がおっしゃったようにヤマト王権との関わりですね。ヤマト王権がここを重視したという、この地域の力と、外的な関わりと申しましょうか、それは具体的にはヤマト王権との関わり、それらがこの３つの初期の前方後円墳を営ませた背景ではないかと、理解するところでございます。

中期に関しては、先程来、度々出ている 17 ページのこの地域ごとの編年表で、100m級でも一際大きいのが志布志湾肝属平野辺りに唐仁大塚古墳、そして更に横瀬古墳などがあります。このような状況に対して、先程、白石先生のご講演の中にあった、広域首長連合というお説に対して、私も全く賛成でございます。つまり、この編年図でお分かりのように、地域ごとに首長が居たわけですが、かれらを全体としてまとめとる首長の連合ということが背景となって、一際大きい唐仁大塚古墳、あるいは女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳、そして横瀬古墳といった巨大古墳を造る背景になっていったのではないでしょうか。この図のように、それぞれの地域に首長系列があったのが、４世紀の終わりから５世紀にかけての中期の頃に、非常に大きな一つの政治的世界を形成したと考えます。これは言ってみれば原日向国というべきではないかと思うのです。こういう下地があって、律令時代に日向国、そして日向国から和同６年のことですけれども、西暦 713 年に肝坏・贈唹、大隅とか姶羅という４郡を割いて、大隅という国ができるわけです。大隅国ができたのは新しいわけで、それ以前はこの図にあるような範囲が日向国であって、それが律令時代になって日向国と大隅国に分かれていきました。そういう意味ではこういう地域の首長連合が出来あがって、それが後の律令時代の国という、地方統治の単位となっていったのです。その点で５世紀は日向国のプロトタイプができたという意味で、原日向国の成立と申したいと思います。

北郷：ありがとうございました。

会場からのご質問の中にも唐津の久里双水古墳の件を挙げてらっしゃるのですが、先程西谷先生のお話の中でも久里双水というのが、古い段階での 100mを超す古墳として認定していいんじゃないかというお話もありました。

ご質問の方で、ちょっと三角縁神獣鏡の問題だとか、鏡の問題というのも出てきているのですけが、今回そこまで踏み込む時間もありませんので、古墳の全体像の問題から話をちょっと進めていきたいと思います。

先程白石先生のご講演の中でもありました、地域連合と見なすべき巨大古墳というのは全国幾つか指摘することができるのだと、このスライドで上げておりますのは、吉備、岡山県の造山古墳というものであります。本当に巨大な古墳で、墳丘規模からいうと、全国第４位ということで、大王陵に匹敵する規模を持っています。唯一、巨大古墳に自由に踏み入れる古墳ということで有名ですけれども、墳頂にこういう形で登ることもできる古墳です。それから、同じく両方とも「つくりやま」という言い方をするのですけども、こっちの方は作山古墳、全国９位でしたかね、同じく巨大古墳がある。こういう全体形をもちます。吉備にもそういう巨大古墳が存在する。それから先程来出てきています大隅半島にも唐仁古墳群、その中に唐仁大塚という古墳があります。後円部に社が建っていまして、そこを見ているところですけども、手前に細長い前方部の痕跡を

残すというものです。社の下には多分石棺の蓋石と思われるものがある、そういう古墳があります。それから横瀬古墳というお話も出てきました。これは非常に綺麗な前方後円墳でして、これは東から撮った写真ですけども、全容を見渡せる大古墳があります。

そういう中で、今お話に出た地域連合、地域首長連合ということの意味合いについて少し考えていきたいのですけども、例えば北郷氏という豪族がいたら、そこだけの自己完結的なところで、歴代首長が前方後円墳を作るのではなくて、各豪族関係での連合があって、その中の首長の中の首長というべき人間に大首長権が継承されていく。それは地域的に宮崎平野から西都原に、それから大隅半島にという形で、その大首長の墳墓が移動する。そういうふうな状況が見られるということですけども、これについてもう一度、白石先生から地域首長連合ということの位置付けというのをもう一度ご定義頂けないでしょうか。

白石：先程もお話いたしましたけれども、こういう地域的首長連合論を、一定の地域でまとまった形で整理して初めて提起されたのは、残念ながら先年亡くなられましたけれども、岡山におられた西川宏先生という方です。この方が吉備政権論という非常に面白い論文を書いておられるわけです。わかりやすいのは、吉備には畿内の大王墓に匹敵するような、この宮崎の大古墳より更に一回りも二回りも巨大な古墳が、今スライドで示していただきましたけれども、岡山市の造山古墳、それから総社市の作山古墳、それからもう一つ岡山市の両宮山古墳ですね、この３つのとんでもなく大きな古墳であるわけです。まさに大王墓級の古墳が吉備にあるわけですが、そのうち造山と作山は、これはいわゆる備中の中心部にあります。一つの政治勢力が２代にわたってそこへ巨大古墳を造っているんですが、それに続く時期の、おそらく５世紀の後半になるかと思いますが、両宮山古墳というのは場所が東に移って、いわゆる備前の地域に営まれているわけです。ですから吉備の大首長権を握った勢力は時期によって移動しているわけです。備前、備中、備後、美作という非常に広範囲の首長達のリーダーになった盟主のお墓は、５世紀前半の造山、作山古墳の段階は備中の勢力がその位置についていた。ところが５世紀の中葉過ぎになると、今度は備前の勢力に移るわけですね。

これは先程も申しました奈良県の葛城地方でも同じです。葛城地域の５つの古墳群の中に、大王墓に準ずるような 200mを超える前方後円墳が１基か２基ずつあり、それがいずれも少しずつ時期を異にしているわけです。これはその地域の首長達が政治的に連合して、葛城政権ともいうべき一つの政治的まとまりを作っていたと考えないと説明がつかないわけです。おそらく文献史料にみられる葛城氏の実態は、まさに葛城地域の首長連合そのものではないか。また吉備には吉備氏という有力な豪族がいたことになっておりますが、これの実態も吉備の首長連合にほかならないのではないかと思います。南九州の場合何と呼ばれていたかわかりませんけど、やはり同じような首長連合体制が少なくとも４世紀から５世紀に中頃くらいまで続いていたということは、疑い得ないのではないか、それ以外にこういう南九州の大型古墳の特異な在り方を説明する論理は見当たらないということですね。

北郷：ありがとうございました。

ちょっと畿内の古墳群の分布図を示しました。初期といいますか、早い段階の古墳というのが

奈良盆地、天理だとかそういうところでね。少しこれは図式的過ぎて色々と問題点も含むのかもしれませんが、近つ飛鳥博物館の図録の中から出したのですが、要するに内陸部の奈良盆地に始まり、それから段々時期が下るに従って、大阪平野の方に古墳群の分布が広がってくる。そして、百舌鳥・古市という巨大古墳群が大阪平野に造られていく。こういう形で、大王陵の変遷というものも、時期と場所で変遷していく。それから内陸部においては、先程のこういう佐紀盾列古墳群、馬見古墳群、こういったところが葛城氏に関係する墓域ではないかと、そういうふうに考えられている古墳群も存在するわけです。

それを畿内の王の中枢的な動きから、時の王権、あるいは政治権力の成立過程というのを読み込んでいこうということになるわけですが、同じ質問ではあるのですけども、石野先生の方では、どのようにこの広域地域首長連合というのをお考えになられるでしょうか。

石野：私、ちょっと変なことを思ってまして、長突円墳、いわゆる前方後円墳を造るのは、大和との政治的な連合を表すとは限らず、「背景としての権威」として長突円墳を築造するという妙な考え方を持っています。地域の王が大和を利用すれば得だから長突円墳を造っただけだと。ヤマト王権に服属した証として長突円墳（前方後円墳）を造るという動きではなくて、王権と連携した方が政治的にも経済的にも有利であると考えて、それぞれの地域の王が長突円墳を造るようになった。そう考えた方が少なくとも５世紀のワカタケル大王、雄略天皇の時期の前半まではそういう日本列島全体の動きがあったんじゃないか。それが政治的な纏まりとしてくるのが、５世紀末の雄略天皇の頃であって、それはまさに７世紀の律令体制の先駆けになると考えた方が、日本の歴史は分かりやすいんじゃないかと思ってます。そういう４・５世紀の列島史の動きの中で、生目古墳群や西都原古墳群の動きを見ると、また違った見方が出てきて流動的な地域王権の凄さがかえって見えてくるんではないかと思ってます。

北郷：最近、全国で古墳の調査、それから研究が進んできますと、地域の在り方というのが、私も大学で勉強したころは、ヤマトを中心に一元的にその勢力が広がってきて、一元化されていくのだというふうに、図式的には理解してきたわけです。しかし地域、地域にやはり自律的な勢力というのがあって、そことの関係の中で、いわゆる日本列島の全体像を掌握していく力が形成されていく。その中でも、一元的な話ではなくて、やはり地域単位での地域性というものをもっと評価をしていく必要があるし、その評価の中で古墳時代像というものも、かなり変わって見えてきた部分があると思います。それで何時の時期に、しっかりした基盤ができるのかについては、またそれぞれの研究者の中でも考え方が異なる部分というものもあります。

この話は非常に大きな話になりますので、少しまた南九州の古墳文化に話を戻しますと、今前方後円墳だとか、高塚古墳の問題を中心に考えてきましたが、生目古墳群で大きな課題というのは、南九州在地の墓制というふうに私達が位置付けてきた、地下式横穴墓が混在するのだということもあります。実は 15 年以上前、生目古墳群の発掘調査が進展する以前はですね、対岸の下北方古墳群には非常に大きな地下式横穴墓があって、金製の耳飾等を出した５号地下式横穴墓というのが下北方古墳群にあります。それで、対岸には地下式横穴墓が共存する。しかし生目古墳群には地下式横穴墓はないのだというふうに考えてきました。私も若い頃書いた論文の中では、

そのように大淀川を挟んで地下式横穴墓を含む群と、ない群があるのだというふうに考えてきたんですが、実はその生目古墳群の中にも大きな数として、地下式横穴墓が出てきたということになるわけです。

全体像をいいますと、南九州は前方後円墳というのは海岸寄りの地域にしか存在しないわけですね。極端に言えば西側の薩摩半島にはいわゆる前方後円墳は存在しないということになります。これはやっぱり南九州の地域性の理解の上で、一つのキーワードになっていくと思います。それ以外に、いわゆる在地の墓制である地下式横穴墓、それから西側からの墓制としては板石積石室墓、あるいは石棺墓というふうに呼ばれているものが存在するわけです。こういう地域に存在して地下式横穴墓の分布圏は、大きく５つぐらいの地域分けができるのではないかと考えていますが、非常に千差万別の大きさ、それから形状を持つということが分かっています。

ところが、最近これも 10 年前に近い調査成果になりますでしょうか、韓国の公州（コンジュ）、要するに百済の首都になるわけですけれど、その郊外の丹芝里（タンヂリ）という場所から、いわゆる横穴墓、或は地下式横穴墓、どちらで定義していいのかという問題はあるのですけども、地下に空洞の部屋を掘る墳墓が発見されました。そういう発見が契機になって、実は戦前にも韓国で類する地下式横穴墓ないし横穴墓の発見が実はあったということが分かり、こういう発見が続きますと、またその後にも、これも地下式横穴墓だな、横穴墓だなというものが、発見されております。その地下式横穴墓について、新しい知見も含めて柳沢先生の方で南九州の地下式横穴墓の位置付けということを含めてお話頂けますでしょうか。

柳沢：ただ今、北郷さんからお話がありましたように、従来、日本固有の墓制と考えられてきた横穴墓や地下式横穴墓が、ここ 15 年ほどのあいだに韓国忠清南道の公州（コンジュ）や扶余（プヨ）で集中的に発見されています。この地域は、５世紀後葉から７世紀後葉までの百済の中期から後期の王都にあたります。

一昨年（2012）、韓国の公州市で行われた横穴墓をめぐる国際学会で、全北大学校の金洛中（キムナクチュン）さんが、それまで韓国内で確認された横穴墓を集成されましたが、そのなかに確実な地下式横穴墓が含まれており、大きな衝撃を受けました。地下式横穴墓は、公州熊津洞（ウンジンドン）遺跡２基、扶余オスリ遺跡１基の３例ですが、いずれも玄室の平面形は横長長方形、竪坑の平面形も横長長方形で、玄門は板石を並べて閉塞しています。韓国では南九州に集中する地下式横穴墓が十分に周知されていないため、横穴墓として扱われたと思います。

ところで、これらの横穴墓や地下式横穴墓は５世紀末葉から６世紀前葉の限られた時期に集中的に築造されたことが判明しています。そして、横穴墓は九州北東部に成立した初期横穴墓とほとんど等しい形態・構造です。また、地下式横穴墓は、志布志湾沿岸の串間市崩先地下式横穴墓群のものとほとんど瓜二つと言ってよいもので、これらの地域の墓制が韓国に伝えられたことは間違いありません。それでは、どうして九州北東部や南九州の限られた墓制が百済の王都に伝えられたのでしょうか、人々の介在なしに文化や墓制の伝播はありません。おそらく、先に申し上げた地域の中間層の人々が海をわたって移住したことを物語るものではないでしょうか。

その歴史的背景については慎重な検討が必要ですが、私は、『日本書紀』雄略天皇 23 年（479）

夏四月条にある「百済の文斤王が亡くなった。天皇は昆支王の第二子である末多王が若いのに聡明なのを見て、その国（百済）の王とされた。兵器を与えられ、筑紫の軍士 500 人に遣わして、国に送り届けられた。それが東城王である」という記事と関連するのではないかと考えています。「筑紫」は現在の福岡県をしめす場合と九州島を示す場合がありますが、私はおそらく後者だろうと思います。そう理解して良ければ、九州各地から徴発された軍士が東城王を王都（熊津＝現公州市）に送るために百済に派遣された人びとの一部が現地に留まり、彼らの死後、出身地の横穴墓や地下式横穴墓がつくられたのではないか営まれたのではないかと、想像しています。

南九州以外の地下式横穴墓は、数は少ないのですが５世紀後葉には北部九州に拡散し、６世紀後葉には遠く栃木県真岡市域でも築造されたことが明らかになっています。また、７世紀代には千葉県市原市周辺に地下式横穴墓とそっくりな構造のものが認められています。地下式横穴墓は、たしかに南九州で独自に発案された墓制ですが、列島各地や韓国にも分布しており、南九州の人々が様々な地域に動いていることを物語っています。

北郷：早いもので時間が迫ってきました。本当は、２時間ぐらい時間を取りたい所であります。

今、地下式横穴墓の話をいたしました。その中で一つ重要なワードというのが出てきたわけですけれども、それは、いわゆる軍事力の問題で、非常に武器を豊富に保有する地下式横穴墓の存在というのが、非常に重要なポイントになるというふうに思います。

先程白石先生のご講演の中で、いわゆる広域首長連合の成立の契機だとか、そういう中に鉄生産、鉄製品の問題で、これはもう日本列島の中に留まる課題ではなくて、朝鮮半島、特に伽耶という地域との関係の中で、東アジア規模で考えなければいけない課題になるわけです。その鉄生産と同時に、これは私もそういう考え方を持っているんですが、いわゆる南九州にヤマト王権が期待したのは一つは軍事力、それから海上交通の権益というものがあったのではないかといふうに考えているわけです。特に地下式横穴墓というのは、非常に小地域の自律的な群を形成していくという特徴があって、いわゆる高塚古墳の社会とは少し異なる体制を持っていた可能性を考えますが、この話をしていくとまた時間になってしまいますので保留します。ただ、先程の白石先生のご講演の中で指摘されたいわゆる広域首長連合の成立、その中に鉄の問題がある。それと同時に軍事力だとか海上交通の問題というものも合わせて考えていく必要があるかなと思います。それと要するに北部九州に対する「遠交近攻」というような政治力学の問題がありますけども、近くを攻めて遠くと結んでいく、そういう包囲網の一つの位置付けとして南九州が期待される部分もあったというふうにも考えることができるわけです。

それでは本当に時間が迫ってきましたので、最後に生目古墳群の評価、位置付け、それともっとこういう部分について、追求していかなければ、より明確な全体像を開くことはできないのではないかという今後の展望といいますか、ご指摘も含めてそれぞれ最後に纏めという形でお話を頂ければというふうに思います。

まずは石野先生の方から。

石野：生目古墳群に最初に来た時の印象は何か妙な地名だなと思いました。その時思ったのが、何回目かの講演会でも言いましたが、最初の大王は崇神天皇ですが、亡くなる前は御間城入彦五

十瓊殖（みまきいりびこいにえ）でしたかね、垂仁天皇が活目入彦五十狭茅（いくめいりびこいさち）なんです。沖縄では東はアガルで西がイリなんです。太陽がアガリ、そしてイリです。ヤマトの初期大王、後に天皇と呼ばれる一族は西からやってきた、イリからやってきたということを自らの名前にしている。その地名が宮崎の生目（イキメ）古墳群に生きているというのが凄いことで分かりやすい。九州の中でも初期の王墓が連続して造られてるんだということを、整備に活かしてもらえたらと思っております。

北郷：ありがとうございました。『古事記』『日本書紀』に登場する日向の位置付けについても今日はテーマとして考えていたのですが、これはパート２ということで、また来年やりますかね、どうか分かりませんけど、少しとっときたいと思います。

次に白石先生。

白石：私も地下式横穴の問題は非常に面白い問題だと思っております。北郷さんが指摘されたように、日向の地下式横穴から大量の鉄製の見事な甲冑がでてくる。これは５世紀、６世紀段階、特に５世紀段階に、日向や大隅の地域がヤマト政権の軍事力として、非常に重要な役割を果たしたことをはっきり物語っていると思います。生目古墳群の調査の成果で面白いのは、生目７号墳という前方後円墳ですが、この生目７号墳という立派な前方後円墳の中心的な埋葬施設が前方部と後円部にそれぞれあるわけですが、いずれも地下式横穴だということですね。私はそれが一番面白いところだと思います。生目の首長は、その段階では前方後円墳を造っているわけですが、埋葬施設はこの地域独自の地下式横穴を採用している。伝統的な地下式横穴を採用しているわけです。ところがその墳丘の形式は、やはり前方後円墳です。これは先程の石野さんの話とも関係するんですが、この議論はもう 30 年以上前から、やっていても解決しないんです。石野さんは前方後円墳の造営をヤマト政権と直接結びつけることには反対で、いつも喧嘩してきたわけです。今日はそれを繰り返すことはしませんけれども、ただ、生目のこの時期の首長はそういう南九州独自の、地下式横穴というものを大切にして、自分の埋葬施設にはそれを採用しているけれども、その墳丘の形態は日本各地のヤマト政権に属している各地の首長と同じ前方後円墳を採用しているというところが面白いところだと思うんですね。

それから、もう一つ今日の議論で気になったのは、やはり生目１号墳の年代的位置付けです。私も発掘調査で検出された見事な葺石の状況を見せていただきました。畿内の前期初頭の箸墓古墳なども、周辺部分しか発掘されておりませんが、物凄く丁寧に葺石を葺いているわけです。最近、京都の向日市の五塚原古墳というやはり前期初頭の古墳を向日市が発掘調査されましたけれども、これは箸墓古墳の丁度３分の１の大きさに設計された箸墓型の前方後円墳で、その平面形も立面形もおそらく箸墓古墳とそっくりであろうということが明らかになりつつあるわけですが、これも大量の葺石を丁寧に葺いているわけです。普通、畿内の前方後円墳でも中期になると葺石は上の方は崩れてしまって、下半分しか残ってないんです。斜面の上の方まで葺石が残っているというのは、要するに非常に丁寧に葺石を葺いたからなんですね。この生目１号墳も、墳丘の高いところまで見事に葺石が残っているんです。これは非常に丁寧な葺き方をした結果だと思います。最近調査された向日市の五塚原古墳も同じで、これは前期でも古い時期の古墳の大きな特徴

の一つだと思うんです。この生目１号墳の年代的位置づけは、今後の宮崎市の調査研究に待つ他ないのですが、今日の話を聞いてる限りでは、あるいは柳沢先生の今日のお話を聞いている限りでは、私は必ずしも納得できません。生目１号墳はやはり古い段階の、３世紀まで上がるかどうかは勿論分かりませんけども、従来位置付けておられたように、４世紀前半に遡る可能性はやはり依然として強く残っているのではないかと思います。その辺を、是非とも明らかにして頂きたいと思います。

北郷：ありがとうございました。

本当に、謎が謎を呼ぶ、あるいは新しい課題というものが出てくるということにもなります。

西谷先生お願い致します。

西谷：二つの問題を申し上げたいと思います。まず一つは、15 年前に行われたシンポジウムで申したことですけれども、先程来話題になっている生目古墳群の 100mを超える前方後円墳は、４世紀にしかも３代にわたって築かれました。そのような古墳が何もないところから突然生まれるはずはございません。その基盤となる地域社会がその前の時代、つまり邪馬台国の時代に出来あがっていて、首長もいました。それがヤマト王権の時代になって前方後円墳を築いたというわけです。そのように生目古墳群成立の前史が重要ですね。私は 15 年前のシンポジウムで宮崎平野の、宮崎郡から諸県郡にかけての範囲に、もちろん名前は分かりませんし、倭人伝にも出てきませんけれども、小国が形成されていたのではないかと考えました。その拠点的な中心集落にあたるのが、たとえば宮崎市の下郷遺跡の環濠集落でありましょう。あるいは、王墓に相当するのが、今どうなっているのか存じませんが、柳沢先生が発掘された檍遺跡の木槨墓でしょうか。ああいう遺跡がございますので、そういう前の歴史から解き明かしていくことが必要ではないかと思います。それが第１点ですね。

第２点は、広域首長連合ということでヤマト王権と日向の地域の関係をやはりもっと具体的に追及して行く必要があります。この点についても 15 年前に柳沢先生が、今日訂正されました１号墳はさておくとして、３号墳については、大和盆地東南部の箸墓古墳の直ぐ北にある渋谷向山古墳、ここは現在景行天皇陵に指定されていますけれども、それと非常に相似形であるということが指摘されています。それで 15 年前にはおそらく大和から墓造りの技術者がやってきて、墓造りに参画したのではないかともおっしゃっています。それと類似した意見としては、２年前に白石先生が館長をしておられる博物館で、南九州とヤマト王権という特別展がございまして、その時に、西都原古墳群から出ている壺形埴輪が、河内の野中宮山古墳から出ているものと、全くうり二つだといわれました。二つならんで展示されていましたが、これはもう近畿地方から埴輪作りの技術者がやってきて、そして西都原古墳群に並べる埴輪を作ったのではないかと指摘されています。そのようなヤマト王権と南九州の関係をもっともっと具体的に追及して行く必要がありましょう。そういう点で、15 年前に問題にしましたし、さらに 30 年前にここ宮崎市で「宮崎の古墳文化」というタイトルでシンポジウムございました時に、今は亡き、網干善教先生が、近畿地方、河内の現在の天皇陵の詳細な地形図と、男狭穂塚古墳・女狭穂塚古墳の地形図を比較されましたところ、両者が相似形であることを指摘されました。たとえば応神天皇陵あるいは履

中天皇陵に指定されている前方後円墳と全く同じ規格で出来ています。規模はその２分の１とか違いますけれども、その背後に日本書紀における大王家、後の天皇家と日向の豪族との交友関係を上げておられます。要するに古事記、日本書紀に出てくるいわゆる神話と、そういう考古学的な事象が符合するのではないかとおっしゃっているわけです。私もなるほどと思って、今もそのように考えております。ご承知の通り、景行天皇紀によりますと、景行天皇は日向髪長大田根を妃にして、そしてその間に、日向襲津彦が生まれたことが出てきます。それから同じ景行天皇 10 年のところでは、その国に非常に美しい御刀媛がいて、それを娶って豊国別皇子が生まれたと記録されています。その豊国別皇子は、日向国造の先祖であると書いてあるんですね。そういうことから言うと、ここに地域首長連合が出来て、その首長が後に日向国造と呼ばれる人なんでしょう。つまり後の大隅国の曾於郡にあたる地方の豪族の娘を娶ったと書いてあるわけですね。そういうことを考えて、考古学的な遺跡、遺物から、そして私達考古学者が文献史料を安易に使うのは非常に慎重でなければなりませんけれども、そういう記紀との対比が必要です。先程も申した新潟県胎内市の畿内型の古墳についても、崇神天皇 10 年９月９日に、いわゆる四道将軍が派遣されますが、北陸道には大彦命が派遣されているという記事が見られます。そういうことと関わってくるのではないかという解釈もできます。このように考古資料と文献史料を統一的に、ヤマト王権と日向との関係で見ていくこと、そしてその暁には、一体それがどうしてヤマト王権と日向が結びつくのかという、背景について先程北郷さんが解説されたとおりでございますけれども、やはり、そういった問題は今後引き続き検討していく必要があると思っております。

北郷：ありがとうございました。

時間を過ぎてしまいましたけれども、最後に取りということで柳沢先生お願いいたします。

柳沢：私がこちらにまいって 23 年になりますけれども、その２年後に藪をかき分け生目１号墳や３号墳に登ぼり、これらが前期古墳だと確信したときは本当に感動しましたね。その２年後に、宮崎平野周辺部に分布する膨大な数の前方後円墳を整理して、前期にさかのぼる前方後円墳を抽出し、生目古墳群の重要性を提起しました。

その頃、宮崎県が県史を刊行のおり、付篇として県内の前方後円の墳丘測量図を集成した本を作ろうという計画が進行していました。はじめは、生目古墳群は計画外だったようですが、私の提起が契機となったようで、県史編纂室から生目古墳群の墳丘測量図の作成依頼がありました。生目古墳群の前方後円墳は数が多くかつ大型ですから、貧弱な研究室では手が出ないと思って考古学を専攻する６名ほどの学生に相談しました。すると、学生達から「重要な古墳群だから是非やりましょうよ」と背中を押されて、1996 年のまるまる半年、土・日と休日のすべてを費やして古墳を測量しましたが、１号墳の測量まで手が回らなかったのは残念でした。それはともかく、６基の前方後円墳の測量図の公表によって、生目古墳群の情報が広く共有されたことはよかったとおもいます。また、測量に参加した専攻学生が大きく成長し、あちこちの自治体の文化財保護行政に携わるきっかけとなったのも嬉しいことでした。

今年は生目古墳群に発掘調査のメスが入って 15 年目、ここまで素晴らしい調査成果を生み出

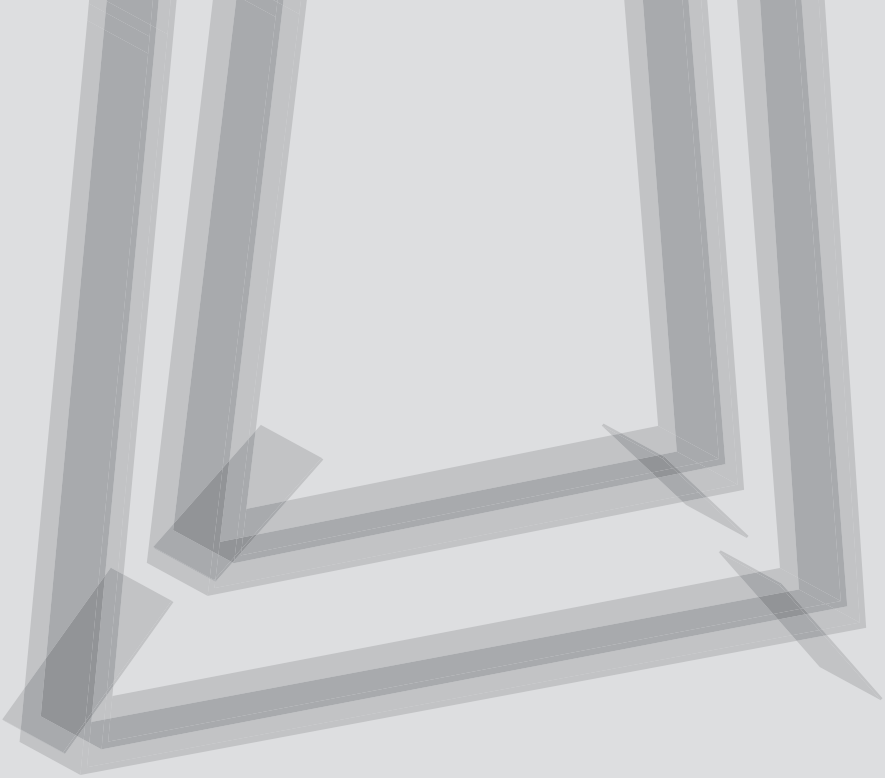
したことは、やはり「継続はちから」ですね。調査以前は、宮崎市の生目というところにすごい前方後円墳群があるらしいね、という程度で留まっていたわけですけれども、今では九州の中でもっとも輝きつつある古墳群と言ってもよいのではないでしょうか。というと西都原古墳群に申し訳ないのですが、生目と西都原は古墳群の性格はもちろん、古墳群の立地環境や周辺環境も大きく異なります。その違いを大事にしながら、宮崎の古墳を考えるうえで代表的な古墳群として、より一層成長されることを期待したいと思います。

北郷：ありがとうございました。

今日冒頭にお話したように、この中では一番下っぱなので、今日はおとなしめに自己主張せずに進行を進めて参りました。最後ですけれども、生目古墳群を見るということは、南九州全体の位置付け、そしてそのことは引いては日本歴史のあり方を読み解くことにも実は直結して繋がっているのだということは、今日各先生のご指摘、ご発言の中からも、伺うことが出来たと思います。引き続きこれは終わりというところはないわけですけれども、継続して宮崎市が生目古墳群の調査を進められます。それから西都原古墳群そして対岸に新田原古墳群の調査や整備というのも継続して進められていきます。そういう中で、もう一度南九州の古墳群の全体像というものを考えていく、そういう機会がもてたらなというふうに思います。

今日は生目古墳群を通して日本の歴史の在り方を紐解いていく、その最初の入り口ということにはなったかというふうに思います。

生目古墳群シンポジウム 2014
生目古墳群の実像
～ 15 年目の再検討～
報告書
平成 27 年 3 月
発行：宮崎市教育委員会
300 部



Ikime Burial Mounds

Simposium 2014

宮崎市 / 宮崎市教育委員会